一九七六年三月

八千代市中世館城址調査報告

八千代市中世館城址調査団
八千代市教育委員会

序　言

本市は、昭和四十二年一月に市制施行し、それを契機として五年間で二倍弱という争激な人口増加率を示し、それまでの純農村地帯から首都圏衛星都市へと変貌しております。都市化に伴う生活環境の変化とともに歴史的環境も急激に失われつつあり、また市民の方々から八千代市の歴史や文化財についての問い合わせが多くみられます。

これらを踏まえ市では市制十周年を記念して「八千代市史」を刊行する予定です。

今回の調査は市史の資料調査と、文化財保護の為の基礎資料作成を目的としたもので、夏の炎天下に行なわれた米本城址調査、冬の寒風吹き荒ぶ中で行なわれた吉橋城址、高津館址です。この結果これ等の遺跡が本市にとって非常に重要なものであるという事が解りました。このような大事な遺跡を市民の力で末長く子孫に伝え生きた歴史の証拠とする事が現代に生きる人々の義務と考えられます。

終わりにこの報告書を完成させて頂いた調査団各位に厚く感謝申し上げるとともに、調査中に種々の御協力を頂いた米本、吉橋、高津の方々に改めて深甚なる謝意を表すものです。

昭和五十一年三月十一日

八千代市教育委員会
委員長　市川浩一

目　　次

序言……教育長　市　川　浩　一
例言
第一章　調査経過…… 1
第二章　遺跡の史的環境と立地…… 3
第三章　米本城址…… 6
1．遺跡調査…… 6
(1) 縄張り…… 6
(2) 普請…… 6
(3) 作事…… 9
2．関連調査…… 9
(1) 史料…… 9
(2) 加茂文左衛門家所蔵品……10
3．参考――「米本城私考」――……11
4．考察…… 15
第四章　吉橋城址……19
1．遺跡調査……19
(1) 縄張り……19
(2) 普請……19
2．関連調査…… 21
3．考察……22
第五章　高津館址……26
1．遺跡調査（縄張りと普請）……26
2．関連調査……26
3．考察…… 27
第六章　まとめ…… 29

図版目次

米本城（Y－1～31）

Y－1　米本城遠景
Y－2　〃
Y－3　米本城から城橋へ
Y－4　一の堀北方
Y－5　大手ふきん
Y－6　土橋（一の堀）
Y－7　一の堀
Y－8　第3のネック附近
Y－9　土橋（二の堀）
Y－10　三の堀と土塁
Y－11　三の堀の堀底
Y－12　二の堀の土塁
Y－13　二の堀の斜面
Y－14　二～三の堀断面
Y－14A　二の堀土塁断面
Y－14B　三の堀土塁断面
Y－14C　三の堀断面
Y－15　米本城跡模型
Y－16　米本神社
Y－17　根宣内（ネギチ）
Y－18　あんば様と咳神様
Y－19　長福寺
Y－20　綱清の墓（伝）
Y－21　矢中
Y－22　追廻し（おんまわ）

文左衛門所蔵品（Y－23～30）

Y－23　刀
Y－24　刀銘
Y－25　染付角鉢、小皿
Y－26　Y－25と同じ
Y－27　鑓
Y－28　茶釜
Y－29　重箱
Y－30　三つ重ね
Y－31　康永三年板碑

吉橋城（K－1～16）

K－1　吉橋城遠景
K－2　〃
K－3　堀底道と土塁
K－4　堀底道と土塁
K－5　堀底
K－6　土塁
K－7　土塁
K－8　土塁断面
K－9　土塁断面
K－10　清水（㊥タ）からの道
K－11　尾崎館址
K－12　貞福寺
K－13　大木戸
K－14　木戸の外
K－15　勝坂
K－16　待坂

高津館址（T－1～8）

T－1　高津館址遠景
T－2　土塁
T－3　土塁断面
T－4　堀底
T－5　堀跡
T－6　屋敷跡
T－7　高津観音寺
T－8　高津観音堂

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　米本城址周辺図……5
第３図　米本城址測量図……オリコミ
第４図　三の堀、土塁断面図……8
第５図　康永三年板碑拓本……9
第６図　吉橋城址周辺図……18
第７図　吉橋城址測量図……オリコミ
第８図　高津館址周辺図……25
第９図　高津館址測量図……オリコミ

例　言

○本書は米本城址、吉橋城址、高津館址の測量および関連調査の結果を記録した報告書である。

○本書の編集、図版作成は村田一男と安達があたった。執筆は第二章～第六章までは村田一男があたり、第一章、第三章の一の(2)の「Ⅲの堀土塁断面」、第三章二の(3)は安達が執筆した。

○米本城址調査では篠丸頼彦より種々の助言を頂いた。記して感謝いたします。

○第三章の三において須田保氏より八千代市史編纂室主幹時代の業積を特別寄稿して頂いた。

○図版の活弧の中の記号はそれぞれの遺跡の図の記号と一致する。

調査団構成・調査協力者

米本城址調査団構成

村田一男　村田一二　佐野純子
田村清和　安達新　中山守
千葉県立八千代高校史学会……門倉孝男
金子洋子　相川和枝　小幡喜代子
塩沢真弓　斉藤和子　冨田公一
須田陽一　吉田信　渡辺雅司
酒井厚子

調査協力者

風間清　加茂勉　加茂正雄
長福寺、土地所有者の方々、米本、内宿、砂戸、坂下、辺田の方々

吉橋城址、高津館址調査団構成

村田一男　水野秋穂
千葉県立成田園芸高校測量クラブ……渡辺昭彦
山崎善雄　小池由高　木内清一
その他

調査協力者

吉橋城址

吉橋清　高橋清　貞福寺
石井光　高橋光　高橋光玲
高橋民司　土地所有者の方々、吉橋花輪、尾崎地区の方々

高津館址

岩井登志雄　高津観音寺　土地所有者の方々
高津部田、中村の方々

事務局

八千代市教育委員会社会教育課　課長　山本勲
木原善和

第一章　調査経過

測量調査

米本城址

面積　八六、四〇〇㎡（三六〇m×二四〇m）

期間　昭和四十九年八月一日～八月十三日

人員　延べ一三三名

内容　現地踏査後、調査範囲に二十四本のトラバース抗を打つ。一～二班の測量班で草刈りをし、蚊に刺されながら台地基部より先端部へ測量を行なった。図は五〇cmづつの等高線で地形をとり、遺構の細部は破線で表現し、縮尺$\frac{1}{300}$の原図五枚を完成した。

吉橋城址、高津館址

面積　吉橋城址　六〇、〇〇〇㎡（四〇〇m×一五〇m）

高津館址　三〇、六二五㎡（一七五m×一七五m）

期間　昭和四十九年十二月十四日～昭和五十年二月一日

人員　延べ八〇人

内容　現地踏査を行ない、調査範囲に約五〇本のトラバース抗を打つ。一～二班の測量班を編成し、五〇cmづつの等高線で$\frac{1}{300}$の原図八枚を完成した。

関連調査

対象　米本城、吉橋城、高津館址に関係するもの

期間　昭和四十九年八月～昭和五十一年三月

人員　延べ一〇〇人

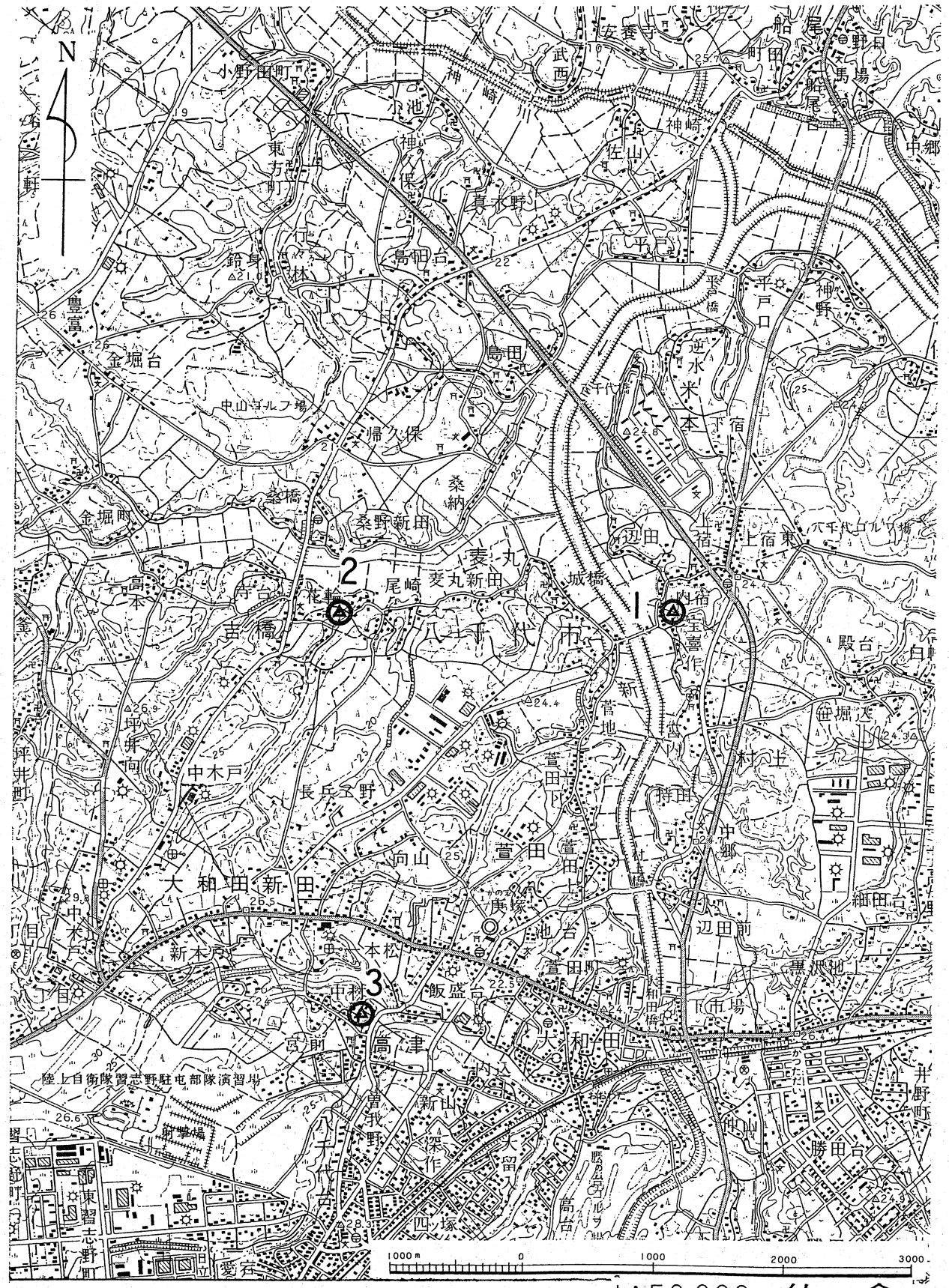
内容　古記録（古文献、寺社縁起等）、聞き込み（屋号、地名、伝承、伝説等）、石造物（板碑、石塔等）、伝承品（加茂家所蔵品など）、写真撮影（遺跡、遺構、伝説地など）、遺構断面調査（露頭の断面実測、写真等）等々の調査である。

整　理

米本城址、吉橋城址、高津館址

内容　図面整理、製図・図版作成、原稿執筆

期間　昭和四十九年十月～昭和五十一年三月



第 1 図　遺 跡 位 置 図

◬印は遺跡位置　　1. 米 本 城 址　　2. 吉 橋 城 址　　3. 高 津 館 址

第二章　遺跡の史的環境

千葉県八千代市は県北部にあって、下総台地の印旛沼水系の西南部に位置する。市域は市中間を南北に貫流する新川（旧平戸川）をほぼ境として近年まで東側は印旛郡、西側は千葉郡の範囲であった。

市内における中世館城址及び関係遺跡は、ここに集録した米本城、吉橋城、高津館址、尾崎館址の他、村上の正覚院や、萱田の飯綱神社砦など、地形上それらしい地点を何か所かを認めることができる。[註1]

当市の隣地佐倉市には、先崎城、志津城、小竹城など臼井城の支城群[註2]があるので米本や吉橋城は臼井城勢力に制されながら並立したものである。

台地は印旛沼にそそぐ水系によって多くの樹枝状の支谷がきざまれ、台地上には無数の古代遺跡が存在する。それらは縄文・弥生・古墳から奈良・平安時代に及び、中近世も含むとその数は約七十余に及んでいる。そのうち古代の発掘例は多いが、中世は未調査である。

ここに集録した中世館城址及び近辺には縄文土器や土師器または須恵器の破片が散布している。古代の生活基盤の上に中世の生活が展開されていったのである。

古代における当市の印旛郡の範囲は「印旛国造」の支配下で、平安時代に入ると「和名抄」に「村神郷」（現村上）という郷名がはじめてみえる。村上の「七百余所神社」は村神＝群神（むらかみ）をさすとみられている。[註3]

古代末期にはいくつかの荘園が成立した。村上郷は「臼井荘」に、新川より西側は伊勢神宮の「神保御厨」で、萱田、大和田、吉橋、平戸、神久保、真木野をはじめ、船橋市の神保、大神保、坪井、行々林、小室、小野田などがその範囲である。高津から習志野市の南部、千葉市幕張にかけては「高津牧」があったようである。また、萱田あたりは時平神社があることから藤原氏の荘園があったとも考えられている。[註4]

千葉常胤が鎌倉幕府創立に尽力し、下総における支配権を確立すると、私営田領主層の土豪は一段と結束し、地域の開発も進行していったであろう。そのような中で、兵農未分離な土豪層が各地に居館を築いていった。尾崎や、高津の館址がそれである。これ等土豪は水系ごとに地域支配力を固め、財力を蓄積し地域に君臨した。村上にある正覚院の木造釈迦如来像（県指定文化財）[註5]は清涼寺式の整ったものである。正覚院には館址遺構が認められる。土豪勢力が自己の屋敷内に仏像を安置したものである。

香取神社造営に関する史料[註6]（鎌倉時代）に、萱田郷・千葉介（地頭）、吉橋郷・千葉介頼胤（地頭）とあり造営を負担している。このことから当地域は千葉氏の支配圏であったことがわかる。

室町時代に千葉氏の宗家が滅んで一族は内紛をくりかえし戦国時代を迎える。文明十一年（一四七九）には太田道灌が臼井城を攻撃した。道灌が萱田の飯綱神社に布陣して米本城を攻略したといわれているのはこの時期にあたる。

一五〇〇年代に入り、上総の武田氏は足利義明と連携して永正十四年（一五一七）に小弓城を攻め、原氏とその家臣高城越前守父子は滅亡し、義明は小弓御所として勢力をはった。このころの関東は小田原の北条氏、古河公方、上杉氏、甲斐の武田、上総安房の里見、正木、武田の諸氏、下野から南下する越後の長尾氏などの勢力が次々と入り乱れ、虚々実々の抗争を展開し、千葉氏系統は一族の中で同様な形態をとる。

佐倉の千葉勝胤は北条氏に属し、天文七年（一五三八）の第一次国府台合戦により一段とその連携を深めた。

天文二十年北条氏康は川越合戦で上杉に勝利をし、同二十三年には、甲・駿・相同盟が結ばれて越後の長尾と対立する。里見は房総における地位確保のために長尾と連携し、佐倉の千葉氏は北条氏康と連携していったから、房総は大きく北条勢と里見勢の二大勢力系統が存在した。

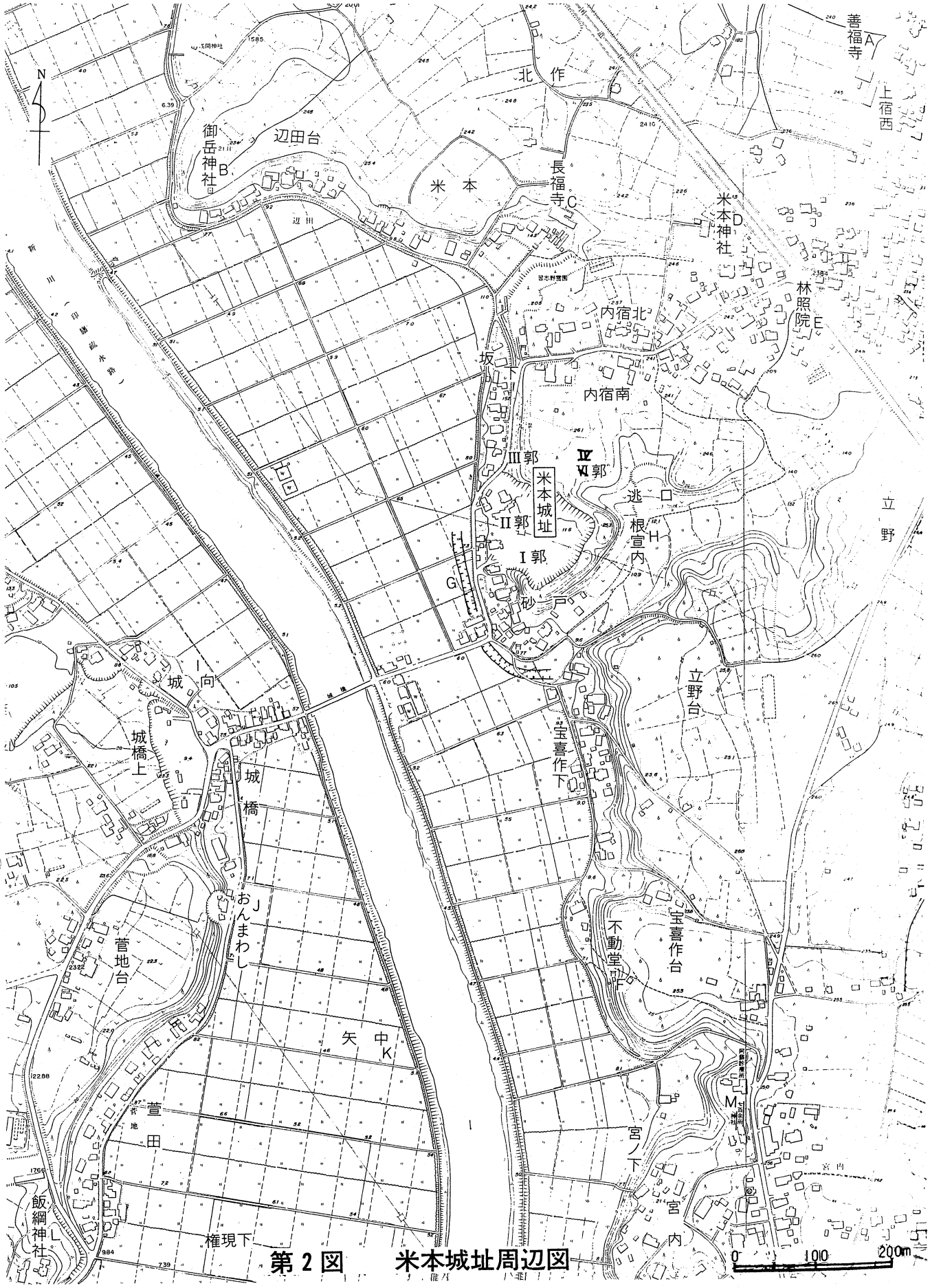
原氏は小弓城を回復し、弘治三年（一五五七）に臼井城に拠り、一大原勢力圏を築いてゆく。

永禄七年（一五六四）の第二次国府台合戦で北条氏康、氏政は里見を滅亡させ房総の多くは北条勢力圏にくみこまれていった。

このような戦国の争乱にあって米本、吉橋両城は築かれ、勢力範囲を固め、盛衰していった。

（註）

1 千葉県教育委員会「千葉県中近世遺跡調査目録」（昭45）に米本城（五―一）、吉橋城（五―二）、権現山砦（五―三）（飯綱神社）が収録されている。
2 清川一史「房総の中世城郭」（「千葉県の歴史」2 昭46）
3 邨岡良弼「日本地理志料」（「紀元二千六百年紀房総叢書」第七巻所収 昭17）
4 前掲 2 に同じ
5 千葉県教育委員会「千葉県文化財総覧」（昭44）
6 千葉県史編纂審議会「千葉県史料中世篇香取文書」（昭43）


N
善福寺A
上宿西
北作
御岳神社B
辺田台
米本
長福寺C
米本神社D
林照院E
内宿北
内宿南
坂下
Ⅲ郭
Ⅳ郭
米本城址
Ⅱ郭
Ⅰ郭
逃根宣内H
G
砂戸
立野
立野台
宝喜作下
宝喜作台
不動堂F
宮ノ下
宮内
M
城橋上
城橋
おんまわしJ
菅地台
矢中K
菅田
飯綱神社L
権現下
0 100 200m

第2図　米本城址周辺図

第三章　米本城址

一、遺跡調査

㈠縄張り（図版Y―1～Y―3）

地形からして舌状台地の突出部の先端を城の最奥部として、側面の自然の断崖を利用する方法で三条の堀で台地と区切り、直線的な連郭式の城が築かれた。

城域は南北三〇〇m、東西は一五〇mで、面積四五、〇〇〇m²あり長方形をなしている。

この城をとりまく防備を（第一図及び第二図）でみてみよう城の北部の小字内宿南は米本の広大な台地にそのまゝ続いている。この台地を北方から最も深く侵入する谷は小字逆水の米本団地北辺の谷である。団地造成によって地形がわかりにくくなっているが、谷の最奥部から台地に南下すると国道十六号線沿いの米本神社(D)に到達する。米本神社の祭神は天御中主命であるが境内に妙見が祀ってある。千葉氏の痕跡を連想させる神社である。米本神社の西には長福寺(C)がある。

また城の東北方の国道十六号線沿いに林照院(E)があり、小字上宿西には善福寺(A)がある。上宿から下宿へかけて県道千葉竜ヶ崎線に沿って近世以降の家並が続いているが、県道より約一〇〇m東側の畑道が古道で屈曲している。この道は保品へぬけ、印旛郡の吉田、岩戸、瀬戸へと続くものである。神野や米本小字山谷には山林中に土塁がよく残っている。このことから米本城の北方や東北方の台地は軍馬育成や、将兵の訓練場としての後背地と考えられる。そして、長福寺、米本神社、善福寺、林照院等は城の北面の防衛地点であろう。

新川に面する防備は、小字辺田台の台地突端部の御岳神社(B)や、宝喜作の台地の不動堂(F)がそうであろう。これらの地点には、物見や小規模な砦などを築き、城の外郭防衛線をなしていたと思われる。

㈡普請（図版Y―4～Y―22）

米本城の普請は、台地を区切る三条の空堀すなわち北から一の堀（外堀）、二の堀、三の堀とⅠ、Ⅱ、Ⅲの三つの郭とⅣの腰曲輪から構成されている。（便宜上以上のように付号をつけた。）

図で明らかなようにⅠ、Ⅱ郭は土取り工事のためにほとんど滅失し、東辺のみしか残存していない。現在最もよく残っているのは、Ⅲ郭である。Ⅲ郭はワ・カ・ヨ・ツ・ソ・レ・タの土塁にかこまれている。遺跡測量の結果と土地の古老の方々の土取り以前の状態を想起していただいた結果から考えてみると普請状態はⅠ郭は土塁ヤ・ク・サ・ア・テ・フ・ケの雑形囲郭で、Ⅱ郭は土塁ウ・ム・ラ・ナ・キとノで区切る長方形であった。

北方の文左衛門(I)（米本城の家老の家と伝えられている――後述参照）のわきから城域を縦断して南下し八石衛門のところに下る道が古くからあり、これは台地から城橋方面へぬける重要なルートであった。南端の土塁の切れ目(ケ・コ)から下る坂道は「リュウゲ坂」(J)とよばれ、Ⅰ郭は「龍害」・「龍谷」という「要害」に通じる呼称もあった。

Ⅰ郭は城の中心部本丸である。Ⅰ郭へ至るには数々の関門を通らねばならない。

北方の文左衛門と市郎右衛門の位置付近には有力な家臣を配置し北辺警備の最初のネックとし、文左衛門から南下すると桝形状(ハ・ヌ)の虎口をもつ大手に出る（第二のネック）。大手をぬけると一ノ堀に連絡し、東側のⅣの腰曲輪(ヘ)（横矢の攻撃力をもつ）にはさまれる。ルの塚状の凸部は通路を一の堀底へ屈折させる遺構である（第三のネック）、咳神様(ツ)の地点をぬけると二ノ堀の土橋(ネ)に達する。土橋はせまく標高二五ｍで直下の堀底(シ)の標高は二〇ｍである。土橋地点は前後から狭撃され追い落される第四のネックである。

Ⅱ郭の土塁の切れ目(チ・ラ)をぬけると深い三ノ堀(ラ)とⅠ郭をかこむ高い土塁(ク)が待ち構えている。これが最後の第五のネックといえる。

一の堀は、最大幅約一五ｍで、深さは一ｍ内外になっているが箱薬研である。Ⅲ郭と北側の外郭（ト・チ・ニ・ホ・ヘ・リ）とは現在は土橋(オ)で連結されている。

二の堀は、第四のネック地点の土橋を境にして西半分(メ)は土取りのために遺構を斜断面でうかがえるのみだが、深さ二ｍ以上の箱薬研をなしていた。東半分（シから東側）は自然の入谷を整形して深い箱薬研をなしている。Ⅱ郭東端の土塁標高二七ｍとの比高は一一ｍもある。二の堀は南北方向の舌状台地を切断する重要な役目を果している。

三の堀は現存する部分でみると堀底(キ)から土塁の上部(サ)までは五ｍを測り、Ｖ字形をした深い薬研堀であった。

全体に土塁の幅は三～六ｍあり、高さは一ｍ以下から最高は三ｍである。二の堀に並立するⅡ郭の土塁(ラ・ム)は、現存するⅡ郭の土塁(チ)と同等の高さで切れ目をはさんで西側へのびていたという。

測量図で示したようにⅠ郭の「あんば様」がもとあった位置(マ)は城内で最も高い土塁の上であったというから、標高三〇ｍをこえていたであろう。

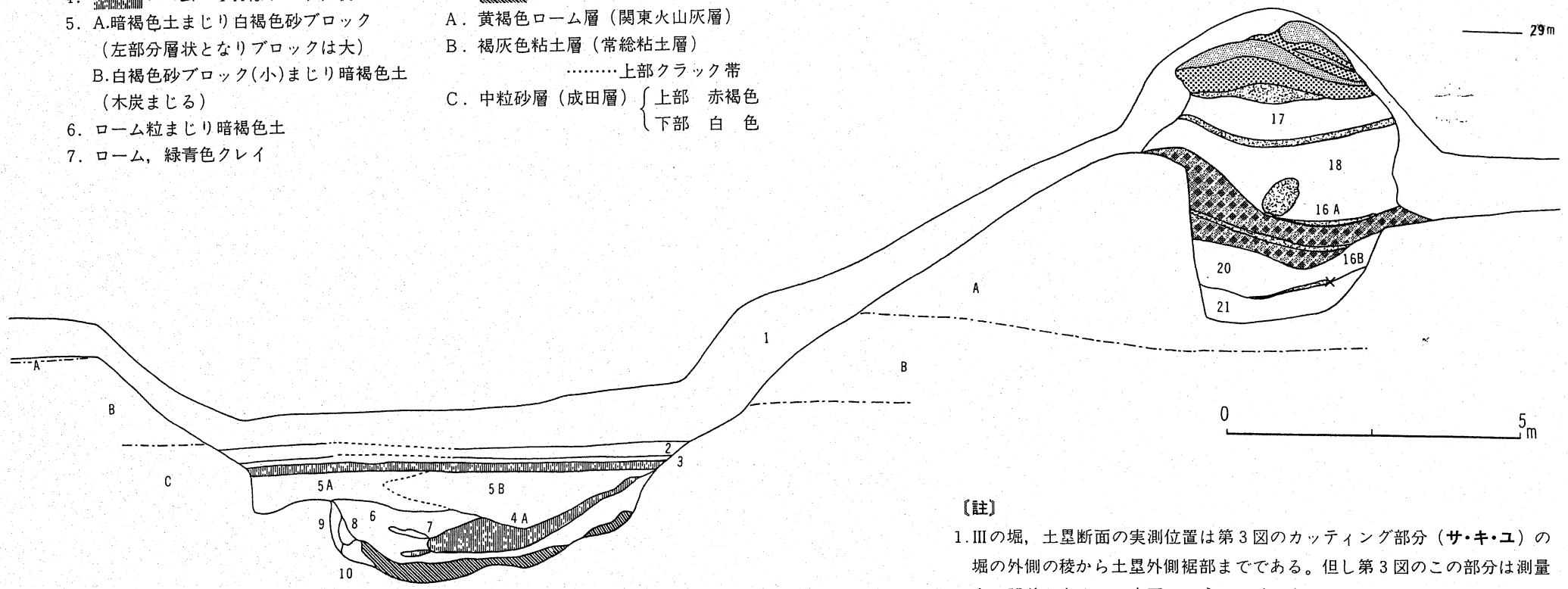
また咳神様の位置は、三の堀に並立するⅡ郭の土塁の残存部(ミ)に祀られていたようである。Ⅲ郭の（ヤ・ク）の土塁は早くから削りとられていたようである。（戦後も土塁を一部崩したことが後出の「米本城私考」にある。）

現状では櫓台が見当らないが、Ⅰ郭の南部(テ)や、Ⅱ郭東端(ノ)などにおかれたであろう。

以上普請について北辺からのみを考えてとらえてきだが南部の守りはどのようになっていたであろうか。もちろん自然の断崖を利用しているが、当時は南部は沼地であって、実はそこに水堀(ロ)を備えていたという。耕地整理によって水田化され、根古屋周辺の道路はつけかえられ、当時の地形は不明である。が水堀は幅一〇ｍくらいあって水をたたえていたという。その推定地点を第三図遺跡周辺図に図示しておいた。

土取りにより露出した断面部分のうち、三ノ堀断面について調査した結果を次頁（第四図）に示した。Ａのローム層を削平して土塁を築き、三ノ堀は再普請された痕跡がある。

1. 表土（暗褐色腐殖土）
2. ローム，クレイブロックまじり暗褐色土
3. 黒　色　土
4. ローム　4Aはブロック状
5. A.暗褐色土まじり白褐色砂ブロック
（左部分層状となりブロックは大）
B.白褐色砂ブロック(小)まじり暗褐色土
（木炭まじる）
6. ローム粒まじり暗褐色土
7. ローム，緑青色クレイ
8. ロームまじり黒色土
9. クレイまじりロームブロック，褐色砂ブロック
10. 白　色　砂
11. 木炭，暗褐色土まじり白色砂
A. 黄褐色ローム層（関東火山灰層）
B. 褐灰色粘土層（常総粘土層）
……上部クラック帯
C. 中粒砂層（成田層）｛上部　赤褐色
下部　白　色



14. 赤褐色クレイブロック(小)
15. 暗　褐　色　土
16. 木炭，焼土まじり黒色土
16Aと16Bは焼土なし
17. ロームブロックまじり暗褐色土
18. ロームまじり褐色クレイブロック(大)
19. ロームブロック，クレイブロック
（黄褐色）
20. ハードロームブロック(中)
21. ハードロームブロック（赤味あり）
×印は陶器片出土

〔註〕

1.Ⅲの堀，土塁断面の実測位置は第3図のカッティング部分（**サ・キ・ユ**）の堀の外側の稜から土塁外側裾部までである。但し第3図のこの部分は測量上の誤差があるので本図のほうが正確である。

1.ロームはA，クレイはB，砂はCにそれぞれ該当し，土は壌土をあらわす。

1.×印の陶器片は自然釉のかかった須恵質の黒色の陶器で，甕の胴部片（厚さ 0.8cm）である。なおこの層はワラと木炭の中に焼土がつまっている。

第4図　　Ⅲの堀、土塁断面図

㈢作　事

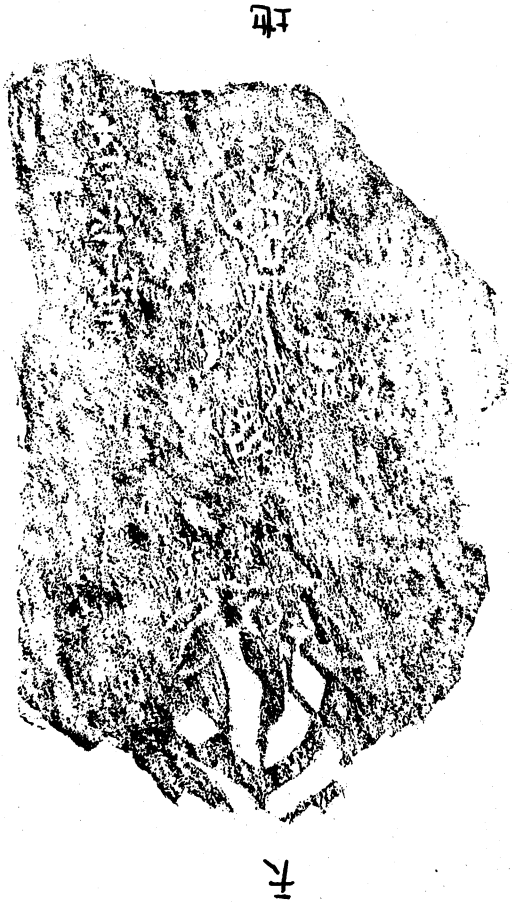
今回の調査では発掘調査をしなかったので、建築物の遺構は全く確認されてはいない。礎石、瓦なども発見されない。現在の咳神様地点にある板碑と宝篋印塔の塔身が遺物である。その他の遺物は、土取りの際に紛失したものもあろう。おそらく当時の建築物としては、門、屏、柵、橋、櫓、住宅、廐舎、倉庫などがあったと思われる。

生活に必要な水源は、大手近くや(ヒ)二の堀土橋下(シ)やりゅうげ坂下のタナヤの井(エ)から得たものであろう。

二、関連調査

㈠史　料（図版Y―20・31）

① 第五図　康永三年（一三四四）の板碑（咳神様・しろぬし様とも呼ばれている「真言板碑」である。）



② 長福寺五輪塔地輪の銘文

（千葉県企画部県民課県史係採拓による）

浄極先通逮□照□虚空
却來観世留覧如夢中事
潜旦　崇岳大晏禪定門

□前□□□願□生死流馬□
□律於滄海路没槃岸往□榆俱
朗於碧□

慶［　　］孝子等　敬白

（白亜紀軟砂岩製）

③ 長福寺所蔵の板碑一覧

（「千葉県の歴史」第三号（千葉県企画部県民課県史係・昭和四十七年二月一日発行）の千葉県金石文所在目録追加（二）より）

	品目名	紀年月	西暦	現存寸法（高さ）
1	武蔵式板碑	文正二年	一四六七	三〇
2	同	文明十六年	一四八四	四八
3	同	文明□		一七
4	同	延徳□		二六
5	同	明應四年	一四九五	五四
6	同	明應五年	一四九六	五四
7	同	明應六年	一四九七	三五
8	同	明應六年	同	三八
9	同	文亀三年	一五〇六	三七
10	同	文亀四年	一五〇七	五五
11	同	永正七庚	（一五一〇）	五〇
12	同	永正八年	一五一一	五一
13	同	永正九年	一五一二	四八
14	同	永正田年		五一
15	同	亨禄□□月□	（一五二八～一五三二）	三一
16	同	建□		二八
	同	年月不明五基		
	五輪塔	慶□		一四五
	（ページ参照）			

（長福寺板碑には、紀年銘に月日を刻してないものが多い）

(二)文左衛門（加茂家）所蔵品（図版Y—23～30）

〔武器類〕

○刀、二口、ともに黒鞘で鍔はつかない。

一口　出羽大掾藤原國重の受領銘あり、身の長さは五三・八cm、元巾二・八cm、先巾一・九cmである。棟巾は〇・四cm、茎の長さ一三・二cm、巾二・五cmである。造込は鎬造で鎬低し、鋒は小鋒でフクラつく。棟は低い庵棟。反りは京反りで、一・一cmと浅い。刀身は錆びつくが刃文は匂ひの湾れがみられる、鋩子は不明。茎は新刀茎で横鑢がつく。

一口　備州長船祐定の刀銘あり。身の長さ五二・一cm、元巾二・九cm、先巾二cmである。棟巾は〇・六cm、茎の長さ一三・一cm、巾二・六cmである。造込は鎬造で鎬低し、鋒は小鋒気味の中鋒でフクラつく。棟は低い庵棟、反りは一・三cmと浅い。刀身は全体に錆びつくが刃文は匂ひの腰の開いた丁子乱れとみられる。鋩子は大丸か？。茎は新刀茎で横鑢だが磨出は鎬切り平筋違である。

ともに脇指で打刀の類であろう。備州は備前であり新しい特色をもつが末備前の数打物と考えられる。出羽は新刀の可能性がある。

鑓　一鑓、柄はとれ穂の部分が残る。全体に錆びつき保存悪し、鈍い太めの袋穂の素鑓である。穂の長さは一八・五cm、元巾四cm、元厚一・三cmで茎の長さは二五・一cmである。かなり新しい時期のものであろう。

〔食器類〕

○磁器

染付唐子唐草文龍鹿角鉢　一鉢、径二〇・七cm×高さ一〇cm、器厚〇・四～〇・五cmの朝顔状の深鉢である。縁は巾広く反り、四方の隅を切り落とした八花形である。底部に高台がつく。白地の上に鮮やかな藍で文様を描く。高台裏に「富貴長春」の字文様がある。内面は底中央に呉須で角のない龍頭鹿体を描き、そのまわりから口縁までは呉須地を掻いて山、雲？、草、松が描かれそこから宝珠棒が伸びる。口縁は写実的な唐草文と唐子がからむ。唐子は口縁四隅に二人と三人ずつ計十人いる。表面口縁は呉須地を掻いて草文があり、胴部は四人の唐子が遊び花生つきの水仙が呉須で描かれる。

染付小皿　五枚、径一三・六cmで高さ二・五cmの高台がつく厚手の小皿である。うち三枚欠損、白地に淡い呉須の染付でたっぷりと釉薬がかかる。二枚は表裏に天下大平、三枚は表に長命富貴の銘款、裏は大明年造の年款がある、いづれも行書である。五枚とも口縁に幾可学文様を施す。長命はろくろを使用した削り高台で底が丸くたるむ。太平の高台はつけたもので底は平らである。

角鉢と小皿は組みとなっており、ともに有田の系統を引く磁器である。角鉢は国産品としてはかなりの優品で中国風の会食に使う盛り鉢に、一方小皿は取り皿として使われたと考えられる。

○漆器

三つ重ね　三重になった椀で、赤塗の地に松竹梅、亀を金、黄緑、黒で描く、径九・五cm～一三cmである。

重箱　二段になる方形の重箱である。縦二四・五cm×横二三cm×高さ一八cm、表は黒漆に赤と金色で松鶴を描き、内面は赤塗で裏蓋に「文」の文字がある。全体として色がぼけている。

〔茶器類〕

茶釜　口径一六cm×胴径二六・五cm×高さ一八cm。二cmの鍔がめぐり環状の把手がつく、文様や銘はなく内側の底に金粉が僅かに残る。蓋は遺失し全体が錆びる。

以上のうち漆器をのぞいて加茂家に伝わる村上氏の遺品であるという伝承がある。時代的に古く考えられるのは刀、特に備前である。染付磁器は年代の巾が広いが舶来品でない限り逆のぼっても近世初頭である。鐚も近世の物であろうが茶釜については不明である。

三、参考「米本城私考」（須田　保）

米本城は、戦国時代千葉氏の有力な家臣の一人であった村上氏の居城で、その城址が米本にある。

旧佐倉風土記によれば米本城は「村上氏世之拠永禄元年三月十三日城主民部大輔綱清自殺城廃焉」という。村上綱清の墓石といわれるものが米本長福寺に現存している。

一説には、永禄七年（一五六四）鴻ノ台の合戦で里見氏の敗退とともに北条氏の属城になったといわれている。

元文元年（一七三六）の吉橋貞福寺の古文書（写）によれば「天正元年発酉年至同五年之夏、（関宿城主中務大夫典佐竹義重発謀叛而北条氏政又房州里見義頼発向干下総令没落布川、小金、

生実、千葉、舟橋、国府台、米本、大和田砌也）闌東大乱一日不安」とある。

米本城はこの時の戦乱に巻きこまれて尓後廃城となったものであろうか。

城址は、米本字内宿南にあり、海抜約二五ｍの舌状台地を占拠し、南及び西は天然の険崖に囲まれ、東は緩勾配の畑地、北は米本の台地に接続している。城址の西約一〇〇ｍに新川が南から北に流れ城址の西側には麦丸に通ずる道路があり城橋によって対岸と連絡している。新川沿岸一帯には水田が拓け、西南約一㎞を距てて、太田道灌が砦を構えたという萱田権現山を望むことができる。

城の形状は、直線連郭で、かっては本丸、二の丸、三の丸からなっていたものと見え、三条の空堀があり、郭を囲んで、それぞれ土塁が築かれている。本丸を囲む空堀は薬研堀、二の丸、三の丸の空堀は箱薬研をなしている。本丸、二の丸は昭和四十一年頃から土取り工事によって破壊され、僅かに空堀と土塁の一部が残されており、土取りをした跡地は畑や牧場として使用されている。

三の丸には、空堀、土塁の跡が残っており現状は林野をなし草木が密生している。

城址には北から南西に通ずる小径がある。この小径の入口は当時虎口であったものか。この小径の終点近くにタナヤ（小さな泉）がある。城址には井戸らしいものの無いところから見て、往昔この「タナヤ」は城の将兵達の用水池であったものだろうか。

城址の面積は約一七八アール、総べて私有地である。三の丸南寄りの台地には、土取り工事の際小径の西側二の丸から移したという板碑がある。この板碑は高さ三四㎝あり、碑面には梵字、壺に入れた蓮華が、刻まれ康永三年（一三四四）二月の記銘がある。この板碑は咳神様といわれ「しろぬし様」とも呼ばれている。この板碑の西隣りに、本丸台上から移されたという金毘羅大権現、石尊大権現、それに大杉大明神の三基の石神様がある。いずれも弘化三年（一八四六）二月の記銘があり、この他に大正九年四月奉納の手洗石がある。

巷説によれば、米本城は太田道灌の攻撃を受け城主村上綱清は戦に敗れ部下の将兵七百有余名とともに村上氏の氏神として尊敬していた村上村の七百余所大明神（第二図Ｍ）の境内に逃れ、ここにおいて全員ことごとく自刃したという。

城址の附近には「おんまわし」(J)「やなか」(K)「ねぎち」(H)等の地名が今もなお伝わっている。

「おんまわし」とは、交戦の際敵味方が互いに追いつ追われつの激戦をくり返したところだという。

「やなか」とは敵の攻撃に応戦して盛んに矢を交じえて矢の落ちたところ、「ねぎち」とは米本城落城の砌綱清等将兵の逃げた道のことであるという。この道のある小字に「根宣内」というのがある。

太田道灌は室町時代中期（一四三二―一四八六）の武将で、名は持資といい、後資長と改め、落髪して道灌と号した。扇谷

上杉の執事で、文明十八年（一四八六）、讒にあい、相模糖谷の館で、扇谷上杉定正に謀殺された。

千葉郡誌中飯綱神社の項に「神社境内に接する所に十一面世観音を祀る。是は往古太田道灌持資の守本尊にして道灌上杉の命を奉じ上総の長南下総の臼井米本小金等の諸城を攻むる。時此処に砦を構へ然して窃かに刻像を陣中に奉じ戦勝を祈り、若し戦勝たれば此地に安置せんと誓って公孫樹の下に埋めたりといふ」と。

飯綱神社縁起記（十一面観世音由来）中に、「太田道灌は戦陣に尊像を奉持し、安房の里見氏を鴻ノ台戦に下し、上総及び下総米本城を攻略し（中略）米本城攻略に当り、尊像に誓文し、戦勝あらば、尊像を陣址に安置すべしと祈った。誓文成就して尊像を安置し（中略）地下五尺の石棺中に在り、村民拝して見れば、文明九年丁酉九月二十四日太田道灌寄附の記銘あり（後略）」とある。

これらの諸記録から見れば、道灌が米本城を攻略したことは事実と見られる。そしてその時期は道灌が萱田権現山（L）に砦を構えた文明九年（一四七七）から、臼井城を攻撃した文明十一年（一四七九）正月以前ではなかったろうか。

ところで村上綱清は天文・弘治（一五三二―一五五七）間の米本城主であり、永禄元年（一五五八）三月十三日自刃したといわれている。即ち綱清は道灌の死後七十二年を経てから自害していることになる。

要するに、道灌と綱清は戦国時代の武将ではあったが年代を異にしているものであり、両者の交戦は有り得ないと見るのが妥当のように思われる。

従って前述の道灌・綱清両者の交戦は、後世における訛伝と解すべきではないだろうか。

吉橋貞福寺の古文書（写）に「村上利清子民部大輔綱清永禄元年三月為信玄自害石碑米本存」というのがある。

武田信玄（一五二一―一五七三）は、戦国時代の武将で幼名を勝千代、元服して晴信、出家して徳栄軒信玄と称した。元亀二年（一五七一）京都に向って西上を開始し、翌年十二月三河の三方原に織田、徳川の連合軍を破って、さらに西進しようとしたがにわかに病を得て陣中に没した。

村上綱清が自害したという永禄元年（一五五八）に武田信玄は三十七才、信玄が関東を鎮在して北条氏と手を組み、上杉謙信の侵略に備えて上京を企てたのであるが、信玄が上京を企てた以前即ち関東一帯を攻略した際に米本城も落城したものであろうか。

一説には、武田信玄は房総の地に攻め入った記録がないといわれているが、上杉謙信が綱清の自殺後八年を経た永禄九年（一五六六）に臼井城を攻撃していることから見て、武田信玄の米本城攻略説を一概に否定できないような気がする。

とにかく信玄と綱清は年代を同じくした戦国時代の武将であったということは、間違いないようである。

城址に安置されている一基の板碑は、南北朝時代のもので、北朝の年号を用い、康永三年（一三四四）二月の記銘がある。

この板碑は今のところ八千代市では二番目に古いと思われるものである。

この板碑が康永三年（一三四四）に建立されたものとすると、城址の台地には、その頃既に人が住みついており、そこに砦か館（やかた）ようのものが構えられていたのではないだろうか。そしてそれが後半の米本城であり、その附近一帯を支配した城主が村上氏ではなかったのだろうか。

日本地理志料巻十九中下総村神の項に「有米本、村上氏世居此、永禄元年、其裔綱清自殺、城廃。未詳其出自。疑古郷司裔也」と。

とにかく村上氏は、かなり古くから城址の台上に居を構えており、板碑は、あるいは村上氏かそれとも村上氏とは特に深い縁のある人の墓石ではないだろうか。地元の人達は、この板碑のことを「しろぬし様」と呼び、また咳神様としてあがめている。「しろぬし」とは、城主の意か、それとも城の守り神ということか、あるいは城址に古くからあるところから城の「ぬし」と呼んだものか、その点は不明である。

この板碑は、一説には、米本城の落城の際、一人の老兵が逃げおくれ、椎のしげみ（大室）に身をひそめたが、咳をしたため敵兵に発見され殺された老兵の墓石だともいわれている。咳のために落命した老兵が地元の人達から、今もなお咳神様として信仰されているが、この老兵が殺されたという米本城の落城は、いつの時代の出来事であったのだろうか。

それはそれとして、村上綱清時代の米本城は、太田道灌によって攻略された城跡に、後年再築されたものではないだろうか。

昭和二十年の終戦後、城址の土地所有者が本丸の空堀を埋めようとして土塁を崩した際、土塁の下から炭化した焼米が多量に発掘されたという。焼米が土塁下に埋れていたということは、土塁を築く以前、既に焼米がそこにあったものと思われる。焼米は、あるいは道灌に攻略された際に兵糧庫の火災によって生じたもので、後年城の再築のとき本丸の土塁下に埋れたため、今日まで保存されたものではないだろうか。

村上綱清の墓石のある米本の長福寺は、村上氏累代の菩提寺といわれているが、その長福寺の隣地（もとは長福寺のものか）から最近十数枚の板碑が発掘されたが、これが村上氏と何等かの関連があるのであろうか。

この板碑のうち年号の明らかなものには、明応元年（一四九二）二枚、文亀四年（一五〇四）一枚あり、年号の一部不明のものに明応年代二枚、文亀年代二枚、永正年代のもの二枚、永正年代と思われるもの一枚がある。

明応、文亀、永正の各年代は、太田道灌が米本城を攻略したと思われる文明年代中頃より十五年後ないし四十三年後の間に建碑されているところから見ると、あるいは村上氏一族の供養塔とも思われないではないが、若しそれが村上氏一族の供養塔であったとしてもそれは太田道灌によって落城した米本城の戦死者将兵の供養のためと思われ、建碑後に自害している綱清とは年代的に相違がある。

それはそれとして、村上綱清時代の米本城は、太田道灌によ

若し永禄元年（一五五八）自害した綱清の定説を否定して、道灌対綱清の交戦説に結びつけようとする考え方が長福寺の板碑によってあるとすれば、それには疑問があるように思われる。

長福寺の石碑には誰のために誰がこれを建てたかということが碑にしるされていない。従ってこの板碑のあることによって綱清自害が文明年代であると断じることができるであろうか。また板碑は、長福寺以外にも米本逆水に二十数枚のものが一か所にあり、その最も古いものでは延慶二年（一三〇九）次いで貞和二年（一三四六）、この他に明応年代のものもあり、また神野には、康永三年（一三四四）、貞和二年（一三四六）と同三年（一三四七）二枚、その他年号不詳のものが数枚が一か所にある。

このように古い板碑は、長福寺以外にもあるところからみると、長福寺の板碑が直ちに村上氏一族と結びつくかどうか。

要するに長福寺の板碑を米本城の口碑の裏付のように見る考え方には矛盾があると思われる。（昭和四十七年一月脱稿）

四、考　察

㈠米本城について

米本山長福寺の住職吉村武雄師は、阿蘇中学校在職時代に「嗟呼！米本城」を昭和三十四年の研究発表会で珠玉の発表をされた。戦国時代の概説から、周辺の地形、城主について、遺物、遺構について、さらに伝説等を印旛郡誌、房総叢書、長福寺縁起を駆使され、自らの究明により明解な考察をなされている。その書の中で矢中伝説について「当時萱田の住民は多く太田道灌方に与し、米本城主を敵視した為、近年に至るまで新川を境とした部落民、互に歪み合い、時に竹槍をも持して相争うたのである。洵に驚くべき奇現象というべし。疏水を隔てた両部落の争いとは、村上・米本組対、萱田・麦丸組をいう」とある。城橋には「城向」という屋号の家があり往時をしのばせる。

また道灌と村上氏の年代に約八十年のずれがあることについて「然し米本城主を印旛郡誌や房総叢書に挙げてある如く、単に二代のみと限定して考えなければ、決して矛盾を生ずるわけではなく、史実に有名な道灌が、遙かにこの地まで遠征し来つた業績は考証が不十分なままに、却って伝説としての面白味を今に残しているのではなかろうか」とのべられている。

㈡城主とその年代

城主の年代を考える根拠は旧佐倉風土記の永禄元年綱清自殺の項であって、村上氏はおそらく米本神社に妙見宮があることや時代背景からして千葉氏の系統であろうという発想が先に立つ。が、すぐ隣の臼井城は数個の支城群をもち、また原氏の動きもあわただしいが、米本の村上氏に関することは臼井城関係からは何一つ浮んでこない。これを究明するには地域的にグローバルにとらえねばならないのではないか。

姓氏家系大辞典[註1]に次の如くある。（原文のまま）

下総の村上氏、印旛郡村神郷より起る。千葉家臣に村上市正、村上金大夫（重臣）、村上源三郎、村上右衛門佐等見之、又相州兵乱記に「小弓勢の先陣村上」又鴻壺戦記に載せたり。

又村上邑附近に米本城跡ありて、佐倉風土記に「村上氏・世々之に拠る。永禄元年三月、城主民部大輔綱清・自殺して城廃す焉」と。其出自詳かならざれど、古郷司の裔かと云ふ。

又信州村上持清の男信濃守成清は足利義明に属し、北条氏と戦ひて自殺し、その男信清・里見氏に仕へ、後徳川氏に仕ふ。家紋上文字、十六葉の菊。寛政呈譜に「武蔵守頼清の後胤判官代為清（為國）が十代孫中務大輔種清（修理、道但、覚玄斉）——左亨亮持清（民部、足利成氏に属す）——信濃守成清（久留里城、一岳、英源）——左衛門信清（家康に属す）——左衛門清政——同清義」と。

千葉大系図[註2]には常将と並んで恒親、村上次郎——恒仲——頼任・村上貫首とある。

また房総叢書[註3]には、村上七郎清平が里見配下に見え村上主膳というのが川越合戦中に出てくる。市原市村上字堀ノ内は「村上城[註4]」があり、大永元年（一五二一）ごろ村上大蔵大輔義芳が在城し、永昌寺に位牌ありという。

以上のように出てくる村上氏は千葉氏系統であること。足利義明に仕え、里見にも仕えたものがあり、市原の村上氏は里見配下である。米本城の村上氏は彼らとどのように関連するのであろうか。

前出の信州村上持清は北条氏と戦って自殺したというくだりは天文七年（一五三八）の第一次国府台合戦のことであり、義明死により里見氏に仕えたものであろう。この村上氏が用いている家紋は、米本城村上氏の菩提寺といわれる長福寺の十六葉の菊と同じであって大変興味深い。

村上氏の出自については結局つかみ得ないが、米本城が存在した年代は金石文や戦国情勢を土台にすると次のように考えられる。

米本城の南西に「根古屋」がある。城の規模と地形からして根古屋集落が展開されるにはせますぎる。前出の康永の板碑を建てた時代は土豪の根古屋時代ではないか。次に長福寺の板碑群は文正から戦国時代前半に集中している。道灌が米本城を攻略したための一群の供養塔とも考えられる。そして変って城主になったのが村上氏ではないか。国綱、綱清によって強力な戦国城郭が築かれた。第一次国府台合戦では千葉一族とともに足利義明について参戦する。弘治三年（一五五七）十月に臼井景胤が死に小弓城の原胤貞が臼井城に入った。米本城の南東辺はにわかにあわただしくなってゆく。原氏は千葉宗家をしのぐ勢力であった。臼井城を中心とした原勢力圏が築かれていったので内紛が生じ原氏と村上綱清は衝突し、翌永禄元年に綱清は自殺に追いこまれたのではあるまいか。綱清が里見氏と連携があったとすればなおさらのことである。

次に長福寺にある五輪塔地輪の銘文であるが、年号は「慶」の字と判読できる。とすれば慶長にあたり、関東に新しい秩序が打ちたてられた時代に綱清の後裔が祖先を供養したものと考えられる。

永禄元年綱清自殺という佐倉風土記の記述を基点に考えてみたが、この年代を誤りとすれば前出の須田氏論文に関連して永禄九年（一五六六）の上杉謙信が臼井城を攻略した際に米本城も

（註）1 太田亮「姓氏家系大辞典」第三巻（昭8）

九年（一五六六）の上杉謙信が臼井城を攻略した際に米本城も落城したと思われる。その際には臼井城の支城群との関連を究明しなければならない。

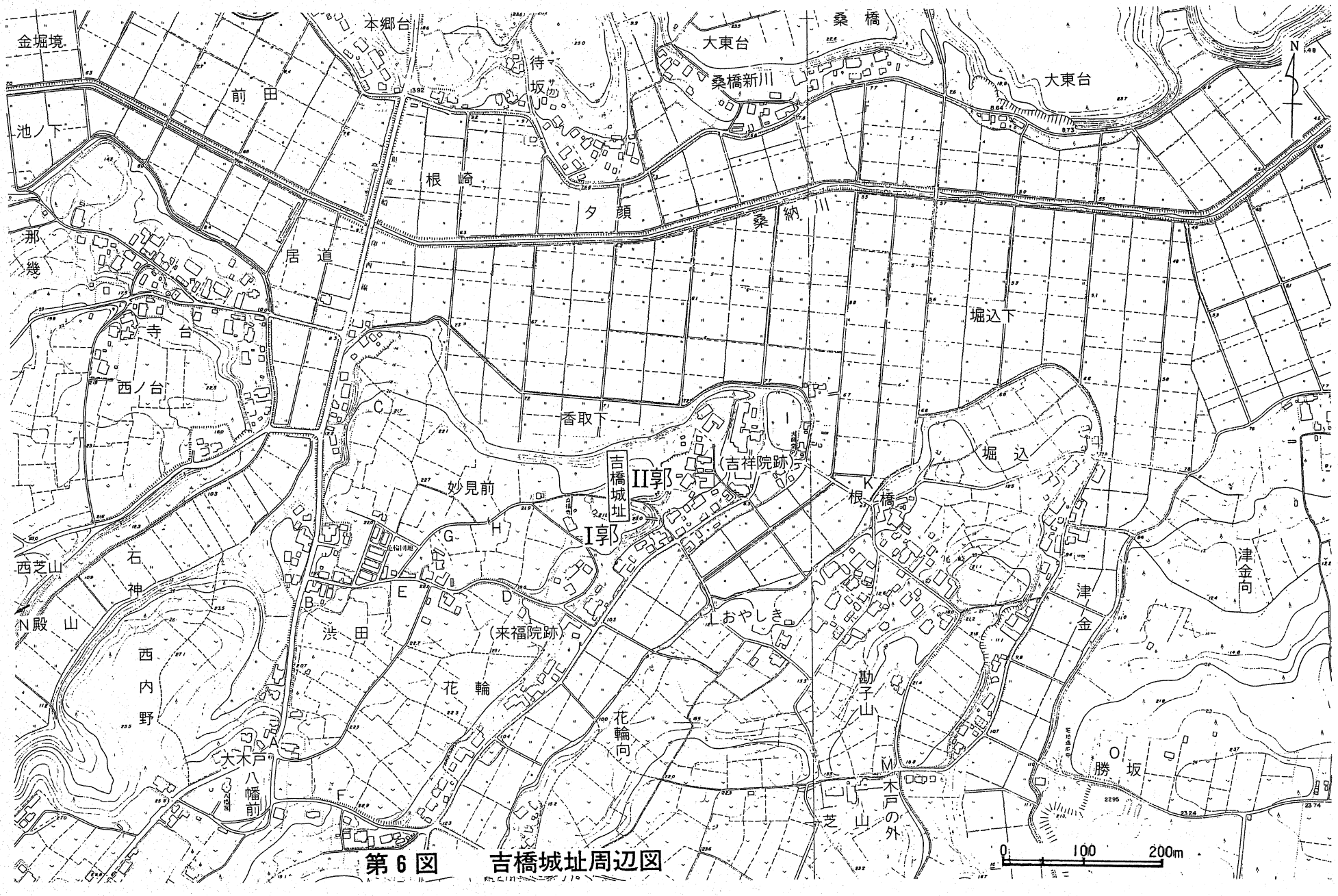
㈢米本城遺構について

米本城の位置は広い台地の西南辺にある。大和田を通る成田街道は近世にひらけた街道であって、大利根図誌によると大和田新田から麦丸に出て米本を経て保品から印旛地方の吉田へぬける古くからの道があった。米本は新川（旧平戸川）の谷と保品地先の印旛沼ルートの中にあって重要なネックをなしていた。したがって現八千代市域のうち東北部四分の一以上を支配していたと考えられる。

小字名に城を中心として内宿・上宿・下宿とあるのは、近世的な城下町の萌芽とみることができないであろうか。というのは、城の規模にくらべて根古屋集落が現根古屋の位置ではせますぎることである。すなわち室町期までは兵農未分離的な根古屋城時代で、土豪の勢力発展とともに城郭を整備し拡大し、内宿地区を外郭として家臣団を集住させ軍事的拠点を作り上げていった。第一節では縄張りをⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ郭に限定したが、文左衛門家と市郎右衛門家をⅤ・Ⅵ郭と加え得れば、近代的な桝形的縄張りが成り立つ。米本城は戦国の台地城郭から戦国平城的な要素[註3]をもっていることになる。

（註）

1 太田亮「姓氏家系大辞典」第三巻（昭38）
2 千葉開府八百年記念祭協替会「千葉大系図」（影印 昭50）
3 房総叢書刊行会「紀元二千六百年記念房総叢書」第二巻所収の「房総軍記」同巻「房総里見軍記」、第三巻所収の「小倉本里見家系図」、第四巻所収の「坂東八館譜」に「村上七郎」または「村上七郎清平」とある。川越合戦は第三巻所収の「管窺武鑑抄」にある。
4 千葉県教育委員会「千葉県中近世遺跡調査目録」（昭47）
5 伊藤一男「房総における中世の城郭遺跡・中近世遺跡全県調査の総括と考察点」（「房総の郷土史」第一号 昭49）所収の二、遺跡の分布と形態的特徴の㈣遺跡の構造的区分と編年による。


金堀境
本郷台
桑橋
大東台
待坂
桑橋新川
大東台
前田
池ノ下
根崎
夕顔
桑納川
那幾
居道
寺台
西ノ台
堀込下
香取下
吉橋城址
II郭
(吉祥院跡)
I郭
妙見前
堀込
K
根橋
西芝山
右神殿山
西内野
渋田
(来福院跡)
おやしき
勘子山
津金
津金向
花輪
花輪向
大木戸八幡前
木戸の外
芝山
勝坂
A
B
C
D
E
F
G
H
I
M
O
N
0
100
200m

第6図　吉橋城址周辺図

第四章　吉橋城址

一、遺跡調査

㈠縄張り（図版K―1・2・11～16）

第一図で示した如く、吉橋城の位置は、桑納川の支谷が、尾崎と寺台から東南方向に台地をきざみ、標高二二mの細長い台地を形成し、その東北端にある。台地中央部は県道が貫通している。

次に第六図により城の縄張りをのべてみる。Aの大木戸地点は、かって旧道は八幡神社裏手でクランク状になっていたものが、現状のようにカーブにつけかえられている。便宜上城址の範囲をこの地点から台地東端に限ってみると、A―C―Iの三地点をとるとC地点を直角とするほぼ直角三角形を呈する。根古屋集落の形成を考慮して谷をはさんだ東側の尾崎地区をも範囲とすると、A―C―I、K―Mを結ぶ長方形となる。南北五〇〇m、東西約八〇〇mあり、面積は約四〇〇、〇〇〇m²となる。

現在郭は二つ存在し、その他堀底道、土塁の痕跡が見られる。便宜上郭をI郭II郭とする。Aの大木戸は大手であろう。おそらく八幡神社裏手部分で桝形状の虎口をもち、部分的に堀割りを残すFの部分や、B地点へと土塁を連結していたものであろう。

D地点は堀底部の形態を残し、EとBへ堀割があったと思われる。特にE地点では、畑の土が帯状に深く連続しているそうである。

Cは約三〇mほど土塁が現存しており、東へのびて、西北台地を限っていたものである。

Gには馬形宮が、Hには妙見宮が祀ってあり、塚や微高地が小道にそって続いていることから、土塁の痕跡とみられる。

これからしてA―B―D―FとB―C―HとE―H―Dという三つの輪郭が浮かび上ってくる。この三つの区域が城の中央部を西側から防備する役目をなしている。

小字香取下沿と貞福寺のあるI郭の南側は自然の崖を利用している。尾崎地区にはM地点に「木戸の外」とよばれる所がある。ここは城の東側台地からの侵入を遮断する防衛地点と考えられる。また第七図の五郎右衛門家の位置は台地から六mほど下って一画をなしているので腰曲輪であろう。

この地域には「根古屋」の地名や屋号が見当らないが、Kの「根橋」やLの「おやしき」といわれる地点は、城の南側の花輪から尾崎にかけて、城を支える根古屋集落が発達していたことをうかがわせる。（尾崎館址を参照）

太子堂北方のI地点は櫓台とみられる。

以上のように見てくると、吉橋城は大木戸を基点とした三つの外郭で台地を区切り、台地の舌状部に二つの郭を連郭し、北部は桑納川の沼地をのぞむ自然の要害を利用し、南・西部は地形を人為的に普請（工事）をして構成されているといえる。

㈡普　請（図版K―3～10）

二つの郭は南北にならんでいて比較差はほとんどない。地形

からして南側のⅠ郭は本丸である。土塁イ・ロ・ハ・ニ・ホで囲まれている。現在貞福寺の境内になっていて、土塁は長年の間に崩されているが、ニの地点の保存状態は特によい。

五郎右衛門家からⅠ郭へ上る道は近代まで存在しなかったから、台地からⅠ郭への出入りはロの北部の土塁開口部（現在寺のブロック屏の部分）のみであった。つまり妙見前から郭に向ってくると、イからリ・ヌへとⅠ、Ⅱ郭を画する堀底道へと進路をとるようにつくられている。

堀底道の堀割はニの下からヌへと薬研堀である。への土塁上部からの深さは五・五mあり、上縁の巾は、へ・ト地点では一〇から一四mである。

Ⅱ郭は、土塁へ・ト・チ・ル・オで囲み、ヨ地点と結ぶほぼ台形をなしている。地元ではここを香取山（カンドリヤマ）とよぶ。香取城ともよぶゆえんである。

Ⅱ郭の南部は堀底道で区切り、リから直角に進入するが、へ・トによる虎口である。ル・チは追落しのために土塁を切って眼下の断崖をなしている。北側はワの堀で区切り、薬研堀である。深さ五・五mあり、巾は上縁で一〇mある。

郭内は東半分は平担であるが、西半分が不整形であるのは、太平洋戦争中に軍隊が駐屯して演習のために変形したからである。へとヨの間に穴を掘ったり、凹凸を点々とつくり遺跡を破壊している。

Ⅱ郭の東北側は土取り工事のために破壊されている。そのために腰曲輪があったかどうかは不明である。東端のレ地点は台状をなしているから、櫓台を形成していたものである。

次節㈡の史料中に東櫓跡に香取山吉祥院を移すとあるのがこのレ地点である。

同じく南櫓に妙見山来福院を移すとあるが、この地点は第六図Dをさす。来福院跡といわれ、現在は花輪農村共同館が建ち、安産講の石仏と行人塚がある。地形が変更されていて櫓台らしき遺構はないが、城域の東西範囲のうち南側中間地点を占めるポイントである。

㈢尾崎館址（図版K―11）

第六図のL地点はお屋敷とよばれている。Ⅰ、Ⅱ郭間の堀底道を下って水田に出、尾崎地区に入った地点である。道の東側に土塁が道と直角に二本あり、昔は道の西側（ブドウ畑）に続き畑道に沿ってカギの手になっていたという。二本の土塁の間に水堀があった。現在は埋没しているが数十年前までは水をたたえヒゴイやマゴイを飼育していたという。残存する土塁のうち外側は長さ三〇m、高さ約三m、巾四mある。内側の土塁は塚状にあり高さ約二mで上部に春日神社が祀られている。ここはお屋敷といわれるとおりまさに館址である。東と南側に土塁と水堀をめぐらし、西北側は現在小川の流れが堀をなしていたものである。水田との比高差は三mで館址の形は東北――西南方向で北部がせばまった細長い台形をなす。単郭である長辺約一〇〇m、底辺約六〇m、面積約五、〇〇〇m²である。これを便宜上「尾崎館址」と呼称する。この遺構は吉橋城測量時に含

めることができなかったのは残念である。

K地点の根橋から尾崎の集落を根古屋集落とするならば尾崎館址はその中心の根古屋であった。

二、関連調査

㈠史　料

千葉郡誌[註1]に次のごとくある。文中の貞福寺末縁起というのはおそらく紛失した貞福寺文書のことであろう。文面からして須田氏が第三章三で引用しているのと類似している部分があるのでここに収録する。

「長　福　寺

連蔵院、龍蔵院、青蓮院、西光院、西光寺、宗派、宗旨、豊山派の真言宗に属す。睦村貞福寺末縁起『高木伊勢守胤貞等與栗原村上大和田臼井等小田原北條氏康父子、攻於鎌倉山ノ内、故上杉朝定憎五将相代三年、説江戸葛西之舊蕃、計夜討天文六年正月七日敗亡（略）。胤貞告家臣伊豫佐康隆言、昨夜有神夢、予不遂生害、慾憩鏑木教胤之館（武射鏑之城主也）委後事康隆等、趨千武射（其後蟄居於匝瑳武田村子孫有千今）於茲高橋伊豫佐康隆（安原佐京進湯淺右近忠等相謀日、勝負武士之恒、豈得毎戦勝謂可不思誰会稽之昔耶、中之財膏於民間既而堪忍千小田原、天文十五年七月廿日（　　略　　）川越合戦之時陪氏康之先鋒而亡於上杉家畢弓、依為舊知而康隆寺之数輩、配賜此吉橋郷康隆等、下千閭家察地里、観於惣氏、鍾於良材、作貞福密寺愛宕之宮社、地蔵堂、衆寮、廻廊、四ツ足門、薬医門、溶室、山門（四天王有）等……投膏油田百餘斛、而賑千香茶典、又移寺町（住古有十二寺今成畠云寺台所是也）此等院處々所謂楠ヶ山青蓮院、麦丸東福院、為辨急務置十二寺於隣里、東檐跡移香取山、吉祥院、南檐跡移妙見山、来福院、此等舊主尊崇之鎮守所知邑閭之産神也。

然所自天正元癸酉年至五年之夏、関東大乱一日不安云云。』

（略）」

㈡伝　説

尾崎、花輪地区には旧家が多く、吉橋城に関する伝説が各家ごとに伝わっているようである。それらの諸説の根元の一つは江戸時代の元文元年（一七三六）に書かれたという貞福寺古文書にあるらしい。貞福寺古文書は貞福寺が明治十六年七月三十一日に花火による火災のために焼失した際に本尊の地蔵尊と古文書だけを持ち出すことができたという。古文書は相当長い巻物で、後にその写もつくられた。が戦後になってから原本、写本共に紛失したので貴重な史料を実見することができない。千葉郡誌の記述と諸説を照合してみると郡誌はその貞福寺古文書や諸説を根拠にしていると思われる。

伝説は旧家の故高橋民司氏、故高橋光元氏、吉橋清氏、石井光氏等の説によると大略次のようである。

吉橋城主は戦国時代に千葉氏の系統の「高城伊勢守胤貞」であった。支配地は吉橋、坪井、古和釜、楠ヶ山、大穴、金掘、麦丸の一部などで八千代市西南部から桑納川が船橋市へ支谷を

きざんでいる地域である。

天文七年（一五三八）に第一次国府台戦争がおこるが、その少し前の天文五～六年に北条氏に攻略された。吉橋城は成田街道からの道（県道）は守りが固く攻撃できないので、吉橋北方の島田台から前進した。島田台の帰久保（かえりくぼ）まで来たところ雨期のために窪地の湿地を渡ることが困難であったから軍をかえしたので帰久保という。待坂（まさか）（第六図のJ）は、攻撃のために待期したところという。その他関連地名として殿山(N)、お屋敷(L)、勝逆(O)（坂）？ がある。勝坂はある戦で敵を討ち負かしたところで、その台地上にその遺骸などを埋納した塚があったという。その位置は工業団地造成に壊されて不明である。

落城の次第は次の如くである。

正月元旦には家の主人が早朝に若水を汲んでお茶と雑煮を祝うのが習慣で、その朝も城主は下僕に松明をともさせて井戸（第七図の㊐タ）へ降りて行った。ところが、北条軍が桑の橋の「妙の前」にひそんでいてその松明のあかりを発見し、北条軍は一せいに攻撃をしたので城は兵火につつまれ占領されてしまった。

城主は家族とともに大和田方面から幕張に逃れて千葉氏に身を守ってもらった。

この時千葉義胤に応援を求めたが間に合わず、遂に落城してしまったという。

北条軍は冬季の乾季をねらって桑納川の沼地を渡り攻め入ったのであった。

また高城氏は、山内・上杉と結び扇ヶ谷上杉を手勢とともに攻めたが敗退した。

落城後、里見義広または義頼が居城した時代もあった。高城氏の家臣達は土着し城主をまつって、貞福寺を開山し、守護神に「血流地蔵尊」を安置した。そして貞福寺を本山として十三ヶ所に末寺を置いた。①来福院（花輪）、②吉祥院（尾崎）、③長福寺（萱田）、④神宮寺（船橋市三山）、⑤東福院（麦丸）、⑥威光院（桑納）、⑦安養院（桑橋）、⑧蓮蔵院（船橋市行々林）、⑨竜蔵院（金堀）、⑩青蓮院（楠ヶ山）、⑪西光院（大穴）、⑫西光寺（坪井）、⑬東光寺（古和釜）（天台宗）以上の寺院である。（千葉郡誌にも同様にあり）。

（なお、貞福寺の境内の石碑には応永元年（一三九四）三月中、成和尚開山とあり、この碑は明治時代に住職が建てられたという。また貞福寺の紋章は月星である。）

土着した家臣は四家老といわれ、城代家老縫之助家、次席五郎右衛門家、忠兵衛家（または湯浅氏）、三左衛門家であるという。

三、考　察

(一)城主とその年代

吉橋城主高木伊勢守以前について千葉郡誌(註2)に「吉橋丹後守」というのが出ている。

「楠ヶ山」

（前略）

吉橋の城主、吉橋丹後守胤俊後宇多天皇の建治年間（凡六百

五十年前）熊野三社を建立したり。

（中略）

吉橋丹後守胤俊は、もと千葉氏の一族にして、睦村神取山に居城を有せしが、或る時某氏と故ありて、干伐を交へ戦利あらずして、一族郎党四散し、その一部は同所に止り、一部は楠ヶ山の台地金堀の前の辺田等に竄匿し、永く農に隠れたりといふ。今楠ヶ山、金堀等に吉橋姓を名乗れるものはその子孫なりとど。」

この吉橋丹後守の出自については不詳だが、これによれば鎌倉期に桑納川の水系に一支配園があったとうかがわれる。

また吉橋城は香取城ともよばれ、千葉郡誌[註3]に次のようにある。

「香取城址

香取城址は往古吉橋周防守（高一万石）の持城なりと伝ふれども、高木伊勢守に至る間の歴史不明なり。抑も高木伊勢守は千葉氏との姻戚関係ありたるかに思はる（威漸く関東に張らんとしたりしが遂に上杉朝定のために亡ぼさる。時は天文六年正月七日なりとも又天文五年丙甲三月七日なりとも云ふ）遺跡としては僅かに旧城址の形を幾分を存すのみ。即ち四丈の高さの小松原にして香取山と称し東北方は田南西方は一面平地なる畑に接続す。香取山下にもと井及溜池ありたりと称すれども目下は池とも思はるる一小部分を存するのみ。遺物として当時の城主高木伊勢守の守護本尊たる血流地蔵尊の貞福寺に残れるのみ（附高木伊勢守の重臣某の所有せしものなりと云ふ刀一振其の末孫なりと称する吉橋清次郎方に無鞘のまま秘蔵せらると）。」

これによると吉橋周防守という名がありこれまた不明であるが、高木伊勢守は、前節の関連調査の史料にもあるように天文五、六年に扇谷上杉朝定に滅ぼされたことになる。伝説では北条氏に攻略されたことになっている。

ところで高木氏の出自については姓氏家系大辞典[註4]によると、高木、高城、竹城などに通じ諸系統があり各地に居住していた。下総で大きく歴史的位置をしめていたところの小金の高城氏は桓武平氏千葉氏族系で、「下総国葛飾郡高木邑（現・松戸市高木）より起り、小金城に拠りし豪族にして」とある。

高城家由来書[註5]などによると、高城氏は原氏の重臣で、胤行のとき原氏と勢力を争ってやぶれ一族熊野に居住したがその三男胤吉は部下とともに帰国し栗ヶ沢にまず根拠をもち、永正五年（一五〇八）ごろから根木内に築城した。次に享禄三年（一五三〇）に大谷口に広大な平山城を築いた。これが小金城で、次に城主は胤辰、胤則と続く。

胤辰は永禄七年（一五六四）北条氏対里見義弘の第二次国府台戦争で北条方に参戦し戦死したという。小金城については、松戸市教育委員会「大谷口松戸市大谷口・小金城跡発掘調査報告」昭和45年に詳報されている。

吉橋の高木氏が小金の高城氏系と考えれば、高城胤吉が栗ヶ沢に根拠をもったころに、吉橋も築造されたのではないか。当時の土豪が水系ごとに支配する形態から考えると、吉橋と小金は距離的に遠すぎるが、小金に対して吉橋城はその配下の支城であったのかも知れない。千葉氏の重臣である原氏を討った足利義明が下総、上総に小弓公方として勢をふるって以来、小金、

吉橋はその支配下に入り、天文七年（一五三八）の第一次国府台戦争では千葉氏の諸党とともに義明方に参戦したのであろう。吉橋城の落城が天文五、六年ということは、第一次国府台戦の一歩手前の戦闘ではなかったかと思われる。

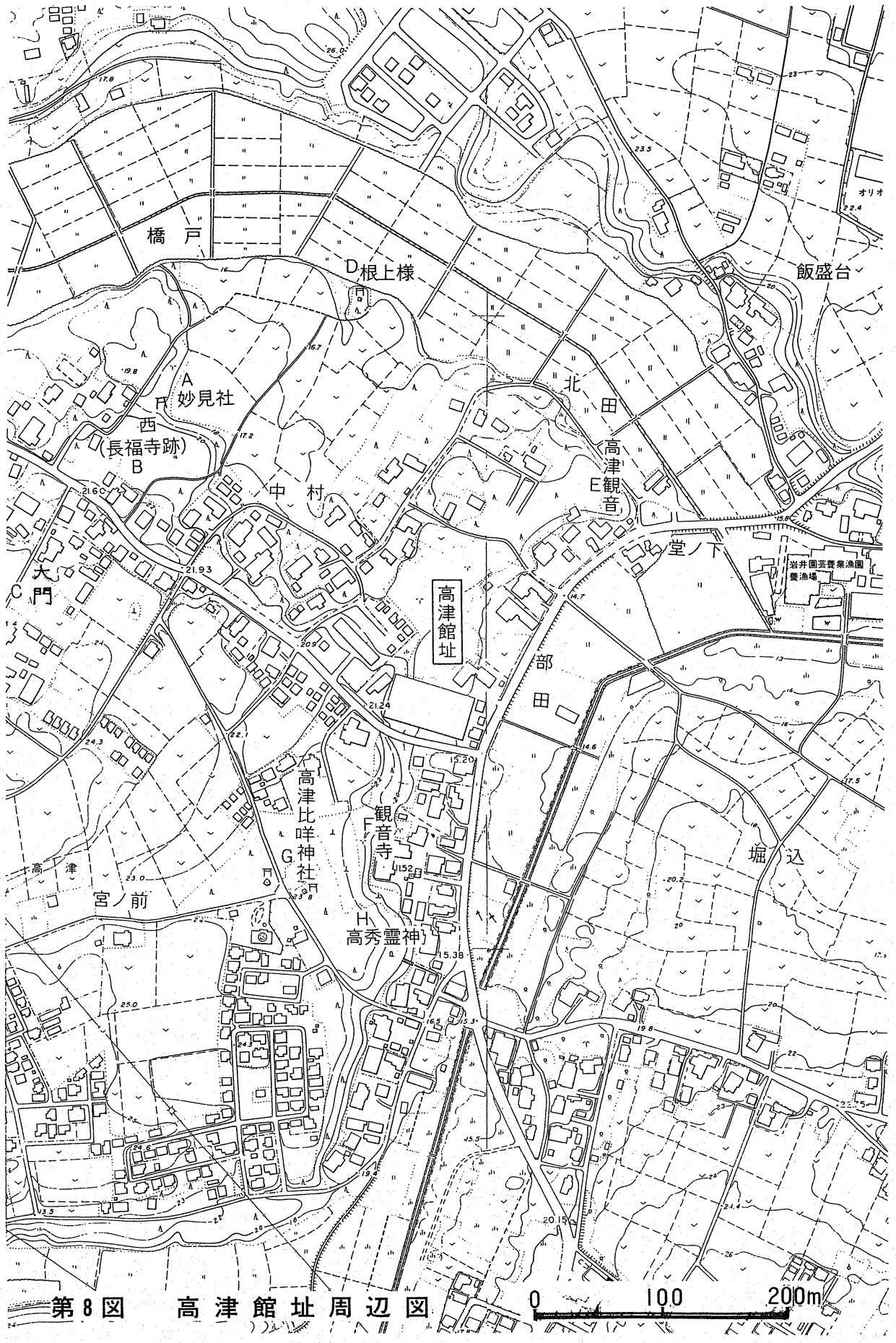
(二)吉橋城遺構について

吉橋城築造の基盤は前出の鎌倉末期か室町期に築かれた尾崎館址であろう。水田との比高差の少ない平担地に立地した兵農未分離の土豪的武士がまず桑納川支谷を支配し、谷津田の開田の進行とともに桑納川水系のすべてを支配する戦国武士の拠点として吉橋城が築造され大きな縄張りをもっていったものであろう。

大木戸から南櫓台あたりは馬場としての要素をもち大木戸から西南方向の中木戸、さらにその周辺まで、軍馬の放牧地と推定される。この地点は江戸時代の小金牧下野牧の外辺に相当し、中世「千葉野」の一部であるから大椎城[註6]、坂田城[註7]のような「牧址」の存在が考えられこの点を究明しなければならない。

(註)

1 千葉県千葉郡教育会「千葉県千葉郡誌」（大45）
2 前掲1に同じ
3 同右
4 太田亮「姓氏家系辞典」第二巻（昭38）
5 房総叢書刊行会「紀元二千六百年記念房総叢書」第四巻所収（昭17）
6 後藤和民「大椎城址の調査上・下」（「千葉県の歴史」4・5号 昭47 48）
7 伊藤一男「房総における中世の城郭遺跡・中近世遺跡全県調査の総括と考察点」（「房総の郷土史」第一号 昭49）


橋戸
D根上様
飯盛台
A
妙見社
西
(長福寺跡)
B
中村
北田
高津
E観音
堂ノ下
大門
C
高津館址
部田
高津比咩神社
G
観音寺
F
高津
宮ノ前
H
高秀霊神
堀込
0
100
200m

第8図　高津館址周辺図

第五章　高津館址

一、遺跡調査（図版T―1～8）

新川の谷が下市場の南で西北に分岐し、大和田の南側を進み、高津の観音堂の東に達し、弁天様の地点で更に西と南に分岐する。南進すると小字部田を通る。東側は小字堀込といい低い緩傾斜地が谷へ接続している。

高津館址はこの部田の谷に面する海抜約二〇ｍの台地の東縁に位置する。

第八図のように西端に妙見社（Ａ）、その南側は長福寺址（Ｂ）、その関係で「大門」という屋号があり小字西の西側あたりを小字大門という。北方には根ノ上神社（Ｄ）、東北方には観音堂（Ｅ）、南西にいって、観音寺（Ｆ）、高津比咩神社（Ｇ）、高秀霊神（Ｈ）が存在する。遺跡の前の水田標高は一四ｍ弱であるから、水田耕地との比高差の少ない位置にある典型的な館址といえる。

遺構は第九図のように一条の空堀を中心として残っている。堀は「二重堀（ふたえぼり）」と呼ばれ、南西（イ）から北西（ロ）に進みカーブして久左衛門宅の裏手に出る。イの堀底はもとはヌの地点まであり（そこからはゴルフバッティング場建設により不明になっている）ヌからリまでは自然の断崖になっていたという。

一方カーブした堀は現在はハの地点から削りとられているが、ニの方向へのびていたようである。それを推定させるのがホの台地残がいである。

イ・ロ・ハの堀は深さ三ｍ、上縁で幅九ｍで整えられた薬研堀である。ヘ・トの土塁は、ヘの部分はもとはチの地点までのびていたという。下辺で幅九ｍ、上辺幅一ｍを測り、ル・オ・ヨ地点と並んで堀からそそり立つ形をなす。

ルの西側は小右衛門の屋敷跡であり、オ・ワ・カと一・五ｍから〇・五ｍの土塁が走っている。ナ地点も屋敷跡である。が、オ・ワ・ヨ・タ・ラ・ナの範囲は非常に複雑である。オ・ヨ・タとワからツへＬ字状に、またソ・ネと三本の土塁に混入するようにレとソの下にかけて深さ一ｍ内外の堀が入っている。部分的な凹地は近代における木根跡だが、この部分は馬込ともつかない異様な遺構である。

館址の前面ヰからノは県道でこれにそって小河川が流れている。この部分に水堀などがあったかどうかは今回の調査では不明である。

二、関連調査

㈠根古屋について

根古屋という屋号について、地元では近世の領主旗本の間宮氏に出す年貢を集めた場所――すなわち年貢屋のことをさすのだという。しかし第九図の測量図にあらわれている如く、土豪の館址遺構からしてまさに根古屋が正しい。

㈡高津姫伝説（図版T―7）

高津観音寺住職関博道氏の話（「葬式仏教」という本にある

という）によると次のとおりである。

藤原時平は平安初期の公卿で、延喜元年（九〇一）に菅原道真を太宰権帥に左遷し、藤原氏の地位を確保したことで有名である。道真は、宇多・醍醐両天皇の信任厚く、藤原氏を押えるために重用されたのだが、左遷され九州で同三年に死んだ。役人きっての学者・文人であったから後世に天満天神として全国的に信仰された。

さて道真が死んでから、延喜六年には藤原定国をはじめ、同九年には時平が、同十三年には時平の子保忠など相ついで一族関係者が七人も死亡した。それは道真追放のたたりであると思われた。

そこで時平の妻と娘の高津姫は都をはなれ、大阪から乗船し東へ下った。やがて下総へ着き久々田（津田沼海岸鷺沼付近）に上陸した。乗ってきた船は石になってしまったという。

人をたよって三山の二宮神社に落ち着き、道真の霊をとむらった。高津姫は高津に移り一生を終えた。彼女が守り本尊としてもっていた「観世音菩薩」は観音堂（第八図―E）に安置されているという。また高津の地名は姫の名からおこったといわれる。

高津比咩神社（第八図―G）は、祭神は多岐都比賣命で明応元年（一四九二）の創立[註1]で高津姫をまつっているという。

船橋市三山の二宮神社は、三山の大祭で有名である。八千代市萱田と大和田の時平神社同様に時平をまつり、大祭は習志野・船橋・八千代の三市にまたがり、藤原氏の荘園の範囲をネットワークしている観がする。

社殿[註2]の一つに「藤原師経公左遷せらるゝや、船にて補ヶ浦を渡り、当地附近の海岸に上陸して一族と共に今の二宮神社附近に居をなし、本社を創建し其祖先時平公を合祀す。」とある。

(三)高秀霊神

千葉郡誌[註3]に「（前略）古昔高秀初め床五郎と称し徳川家康に仕へしが慶長十九年従軍して大阪に戦死せりと。而して従僕岩井源左衛門は本村の人にして当時私に主人の首級を奉じて帰郷し此の地に埋葬し祠宇を造りて祠れりと。而して今尚岩井家（岩井年雄）には当時源左衛門の所持せし刀を秘蔵して記念す。」とある。岩井家にはこれに関する文書を所蔵され、高秀霊神を守護されている。

三、考　察

高津館址は標高約二〇mの台地を背にして空堀と土塁によって、水田に面して存在した。根古屋の位置は堀からすると現在はずれているが、今の根古屋、久左衛門及び与衛門跡の三家の位置が当時の根古屋の範囲といえる。南北九〇m、東西六〇mの長方形で面積五～六、〇〇〇m²である。堅固の堀と土塁を背に母屋と倉をもち、第九図ムの池を前庭とした屋敷構成が考えられる。ノ・ヲ・ク・ヤ・ウは古道であり、ヰ・ウは近代以降に道を形成し、高津団地建設により現在の道幅になったものである。したがって根古屋屋敷を中心に古道にそって根古屋集落

を呈していた。小字中村には中村姓が多いが、高秀霊神にまつわる源左衛門家と並んで集落の草分であろう。

このように実測により概観してみると当館址の型式は小室栄一氏[註4]、後藤和民氏[註5]、伊藤一男氏[註6]の研究に照合してみれば台地と水田面との比高差の少ない台地辺を平担地に普請をし単郭で空堀と土塁をもち、おそらく前面の県道が水堀を構築した位置であり、根古屋集落に続く畑地と周辺の谷津田を支配する鎌倉期の兵農未分離な土豪の居館ということになる。

房総叢書[註7]によれば、驛家の項に、兵部省式の下総国茜津驛、馬十匹、千葉郡伝馬五匹とある。茜津は清宮氏によると高津に相当する。高津、実籾、長作、畠、武石、馬加、検見川は三山ノ荘の範囲であった。武石胤成の支配地に関係すると思われる。また兵部省馬牧に高津牧とあるが当高津に比定されている。このことから、当館址の成立背景が考えられ、妙見宮の存在と考えあわせれば千葉氏系の土豪の支配拠点ではないかと推定される。

さらに同書草田の項に、時平神社があることから藤原時平ノ荘園の存在を示唆している。

時平の荘園が存在したとすれば、高津姫が来住した説の発生もうなづけるが地名に関しては姫の来住以前にあったと考えるのが妥当であろう。

（註）

1 千葉県千葉郡教育会「千葉県千葉郡誌」（大15）
2 同右
3 同右
4 小室栄一「中世城郭の研究」（昭40）
5 後藤和民「大椎城址の調査（下）」（千葉県の歴史5号 昭48）
6 伊藤一男「房総における中世城郭の研究」（房総の郷土史 第一号 昭49）
7 房総叢書刊行会「紀元二千六百年記念房総叢書」第七巻所収「日本地理志料」（昭17）

第六章　まとめ

米本城、吉橋城、尾崎館址、高津館址について測量と踏査を中心に検討をしてきたが、きわめて雑駁な報告であり、さらに究明しなければならない。問題点を次に列記する。

①遺構の発掘調査と文献精査。

②遺構について立地、築城、その他の塁、砦の細部にわたる調査検討と支城関係など。

③周辺他地域の遺構との詳細な比較検討。

④館城を中心に中世の民衆生活がどのように展開されたのか。

高津と尾崎の館址は鎌倉期以降の当地域を代表する典型的な土豪の館址である。高津牧や萱田神保御厨の荘園跡に芽生えた在地の土豪武士勢力である。

米本・吉橋両城について伊藤氏[註]の「県北遺跡群の具体的検討」(1)「遺構の特徴点」を参考にして特徴点を次にあげる。

①半島状台地の先端部に位置し、その先端部に主郭をもっていること。

②直線連郭的構造である。騎馬戦闘集団として大量の馬を必要とすることから「牧址」の存在が把握されること。

③縄張り普請など高度な技術の台上遺構をもっていること。

④良好な水便を確保していること。

⑤城跡周辺に根古屋や宿などとそれに類する地名が残り、城をささえる生活集団の展開がはっきりしていること。

⑥高度な造築技術をもって一地域の拠点として戦国台地城郭から近世的な要素も若干みられること。

米本城は平戸川右岸から佐倉市との境の高野川の範囲、市域の東北部または東半分一帯の水系を支配する拠点であった。弘治三年十月に原胤貞が臼井城に入り原勢力圏を築く中で滅亡したがあるいは永禄九年の上杉謙信が臼井城を攻略した際に滅亡したものであろう。

吉橋城は、桑納川とその支谷一帯を支配する拠点で、城主高木氏は小金の高城氏とともに第一次国府台合戦（天文七年）以前に北条勢により滅亡した。

両城は印旛沼水系の西南部における中世末期の武士支配を代表する一形態である。もちろん八千代市域にとって戦国末期を語る代表遺構である。ところが、確実な館城遺構があってもそれを立証する記録がほとんどないのが中世の特色である。だからこそこれらの遺構はそこに生活した民衆と武士のまさに生きた史料であり史実であり、それを示すのは残された遺構しかないのである。

遺構はいずれも長年にわたる変更や土取りのために部分的に破壊されてしまっているから、これ以上の破壊をすることは祖先を失うことであり市民的財産の一大損失である。なぜなら復元したものはあくまでも復元の価値しかなく、その時代につくられたものが一等史料だからである。最少限残されたこの貴重な遺構を開発の美名のもとに失ってはならない。

以上八千代の中世館城の一端をのべたが、諸先学の御教示を切にお願いする次第である。

(註) 前掲伊藤氏論文(「房総の郷土史」第一号)その他左記の文献を参考にした。

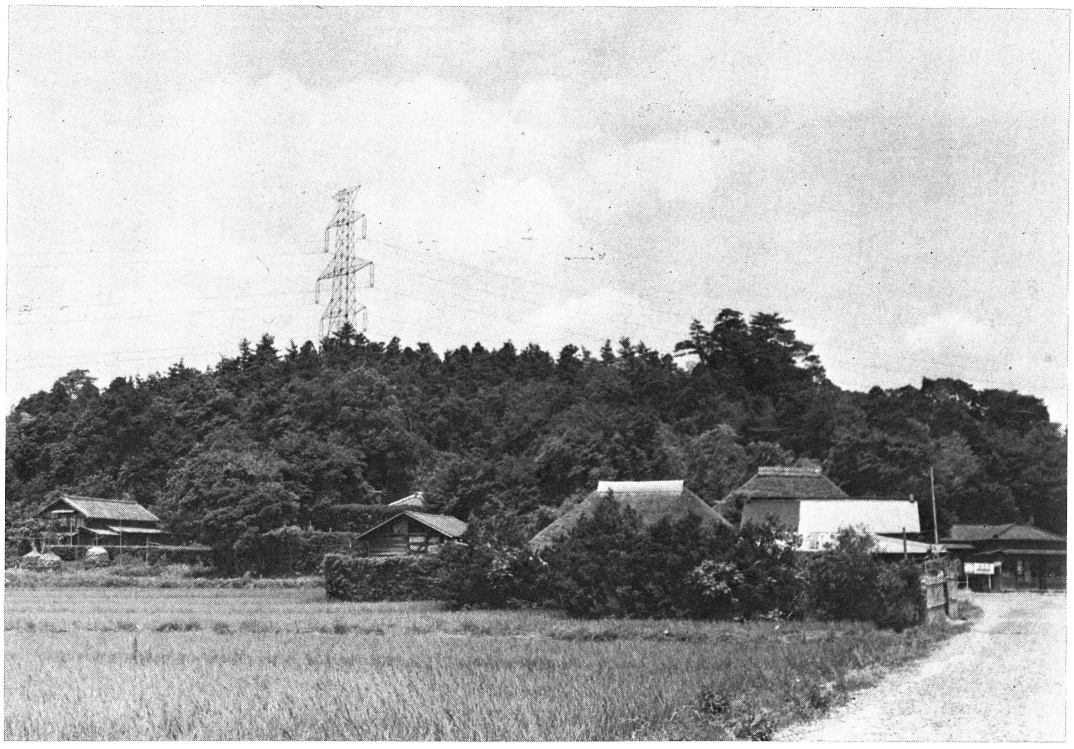
○大類伸・鳥羽正雄共著「日本城郭史」(昭16)
○中峠城跡調査団「千葉県我孫子市中峠城調査報告書」(昭49)
○松子城跡調査団「千葉県香取郡大栄町松子城調査概報」(昭45)
○千業県教育委員会神崎城遺跡調査団「千葉県香取郡神崎町神崎城調査報告書」(昭49)
○清川一史・野口実共著「城郭」別冊「日本中世城郭資料」第三集(昭45)
○千葉県東葛飾郡教育会「千葉県東葛飾郡誌」(大12)

(補遺)

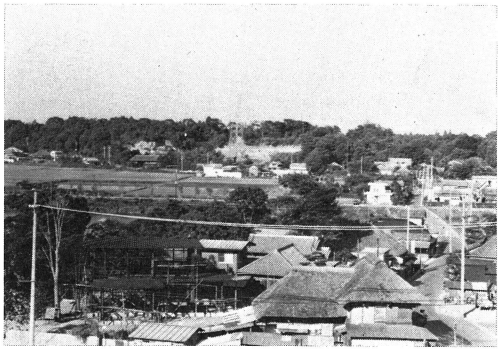
この稿脱稿時に米本山長福寺住職吉村武雄師より、村上氏の末裔と伝わる方が千葉県君津郡袖ヶ浦町横田に在住されていることが判明したとの御報を受けた。後日それについては発表の機会を得たい。

図版

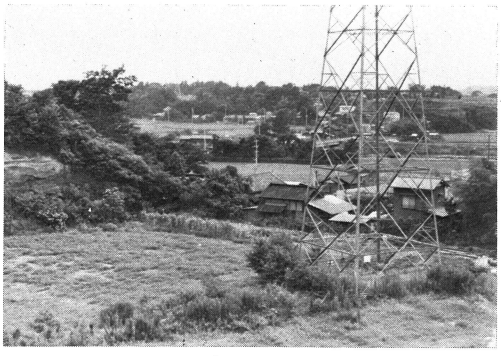
米　本　城　址（Y－1～31）



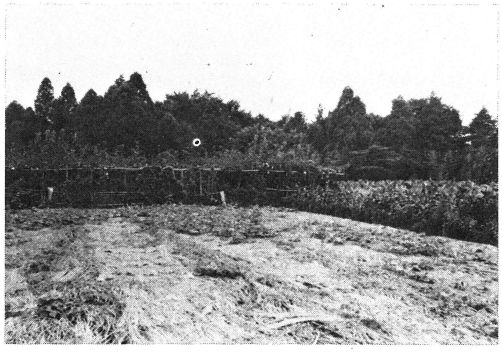
Y－1　　米本城址遠景（城橋より 昭和38年７月　故 高梨三嘉氏撮影）



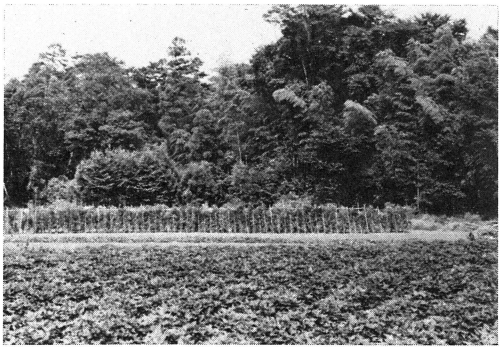
Y－2　米本城址遠景（城向より）



Y－3　米本城址から城橋へ



Y－4　一の堀の北方（台地より）



Y－5　大手ふきん　（ハ、ヌ）

Y－6　土　橋（一の堀オ）

Y－7　一　の　堀（ヘ、ワ）

Y－8　第3のネックふきん（ル）

Y－9　土　橋（二の堀ネ）

Y－10　三の堀と土塁（キ、サふきん）

Y－11　三の堀の堀底　（キ）

Y－12　二の堀と土塁（ナ）

Y－13　二の堀の斜面　（メ）

Y－14　二～三の堀断面　（メ、ユ、キ）

Y－14A　二の堀の土塁断面　（ル）

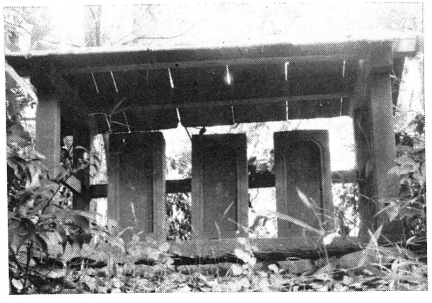
Y－14B　三の堀の土塁断面　（サ）

Y－14C　三の堀の断面.（キ）

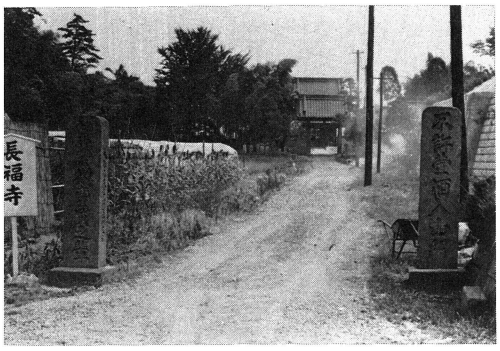
Y－15　米本城跡模型（郷土歴史研究会製作）

Y－16　米本神社（D）

V－17　根宣内（ネギチ）（逃道（にぎち））（H）

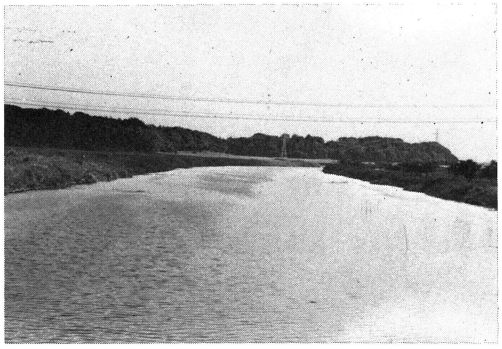


Y－18　あんば様と咳神様（ツ）

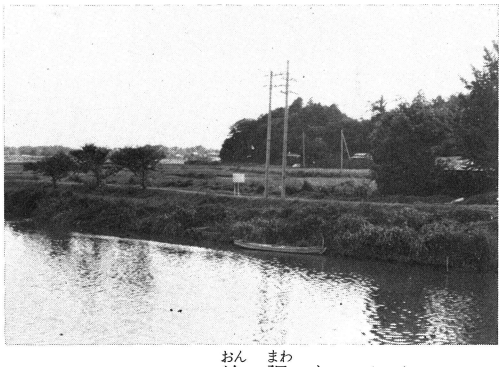


Y－19　長　福　寺　（C）

Y－20　綱清の墓（伝）



Y－21　矢　　中　（K）

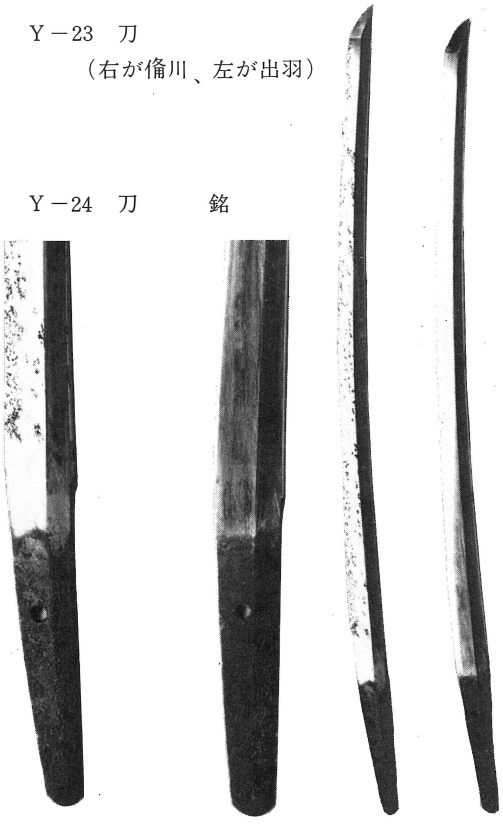


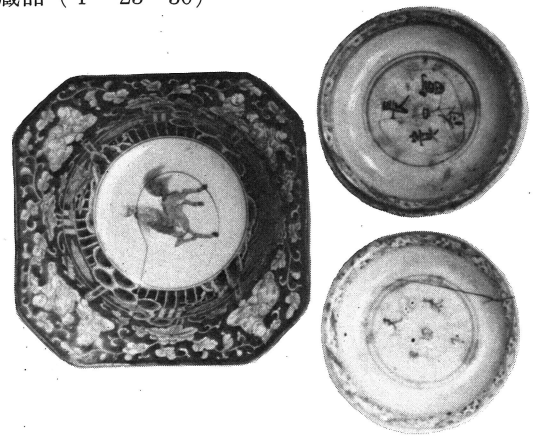
Y－22　追（おん）　廻（まわ）　し　（J）

文左衛門（加茂家）所蔵品（Y－23～30）

Y－23　刀
（右が備川、左が出羽）

Y－24　刀　　銘



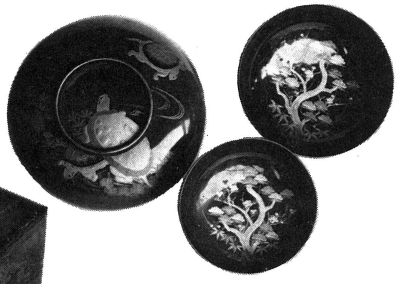


Y－25　染付角鉢（左）・染付小皿（右）

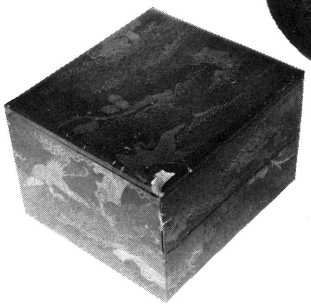
Y－26　Y－25と同じ（横から）

Y－27　　鑓

Y－28　茶　　釜



Y－30　三つ重ね



Y－29　重　　箱

Y－31　康永三年板碑（咳の神様）

吉　橋　城　址（K－1～16）

K－1　吉橋城址遠景（G付近から）

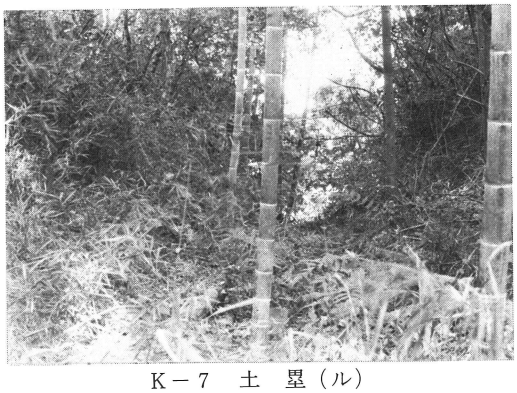
K－2　吉橋城址遠景（桑の橋側から）

K－3　堀底道（リ）と土塁（左はヘ、右はニ）

K－4　堀底道（リ）と土塁（ヘ）

K－5　堀　底（ワ）

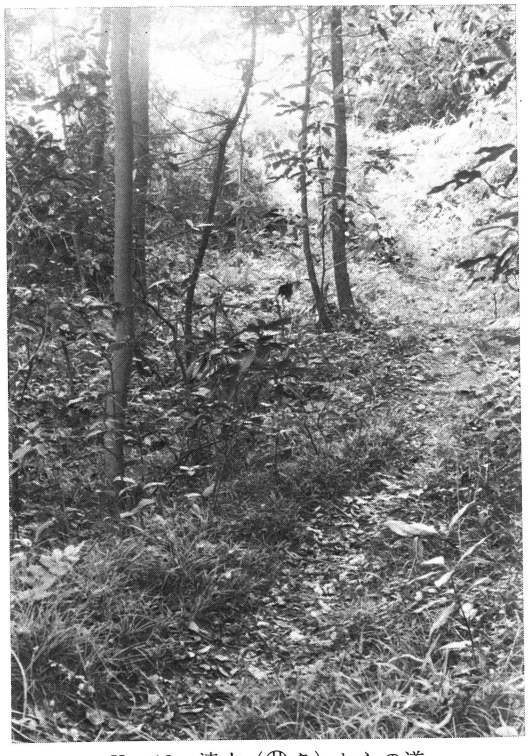
K－6　土　塁（オ）



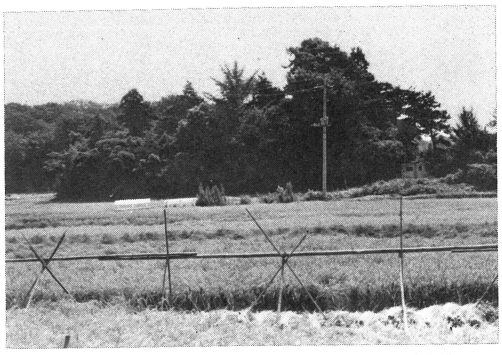
K－7　土　塁（ル）

K－8　土塁断面（ロ）

K－9　土塁断面（ル、ワ、カ）



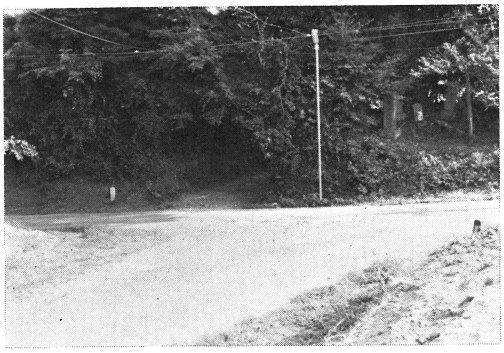
K－10　清水（㊐タ）からの道



K－11　尾崎館址（お屋敷）（L）

K－12　貞　福　寺　（I郭）

K－13　大木戸（吉橋八幡神社）（A）

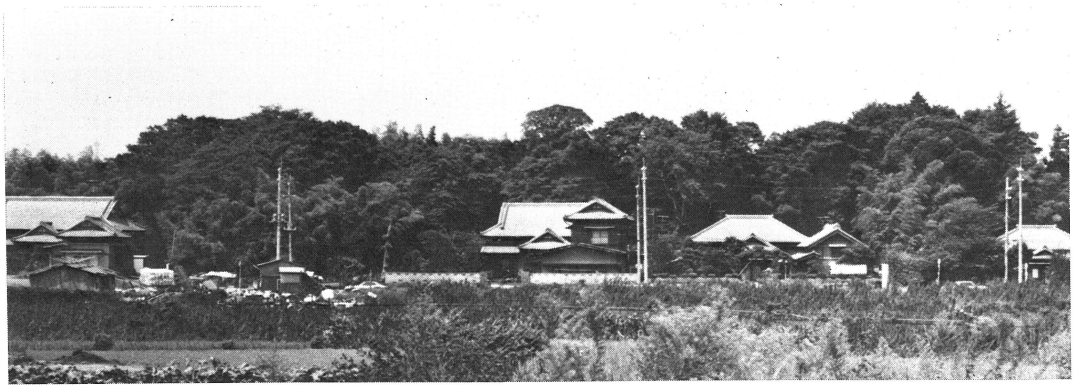


K－14　木戸の外（M）

K－15　勝　坂（逆）（O）

K－16　待　　坂　（J）

高　津　館　址（T－1～8）



T－1　　高　津　館　址　遠　景

T－2　土　塁（ヘート）

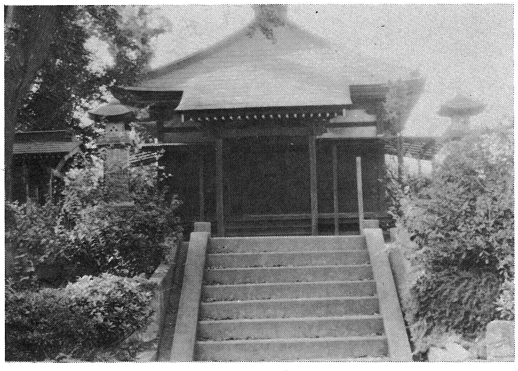
T－3　土塁断面（チ）

T－4　堀　　底（イーロ）

T－5　堀　　跡（ツーラ）

T－6　屋　敷　跡

T－7　高津観音寺　（F）



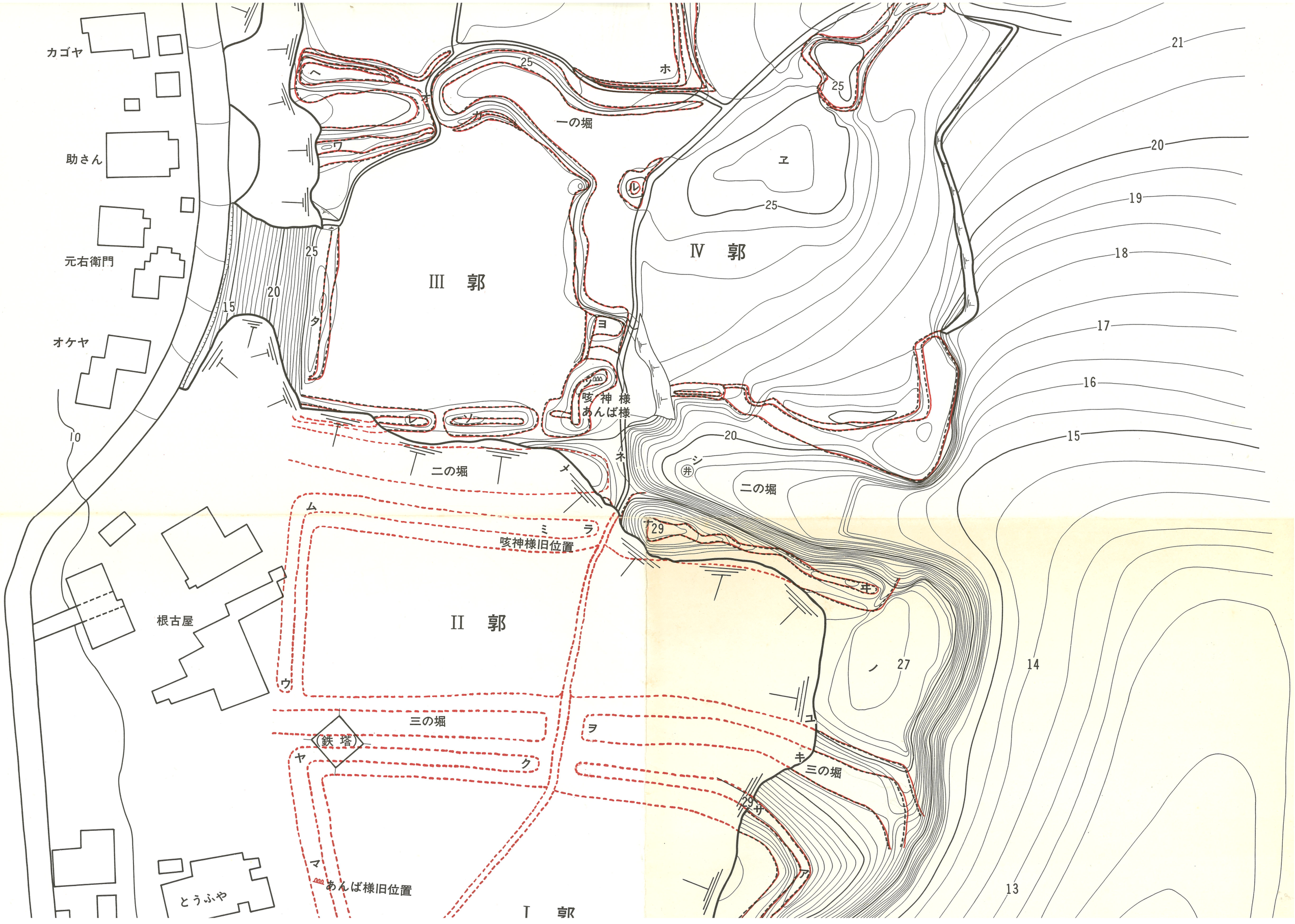
T－8　高津観音堂（E）

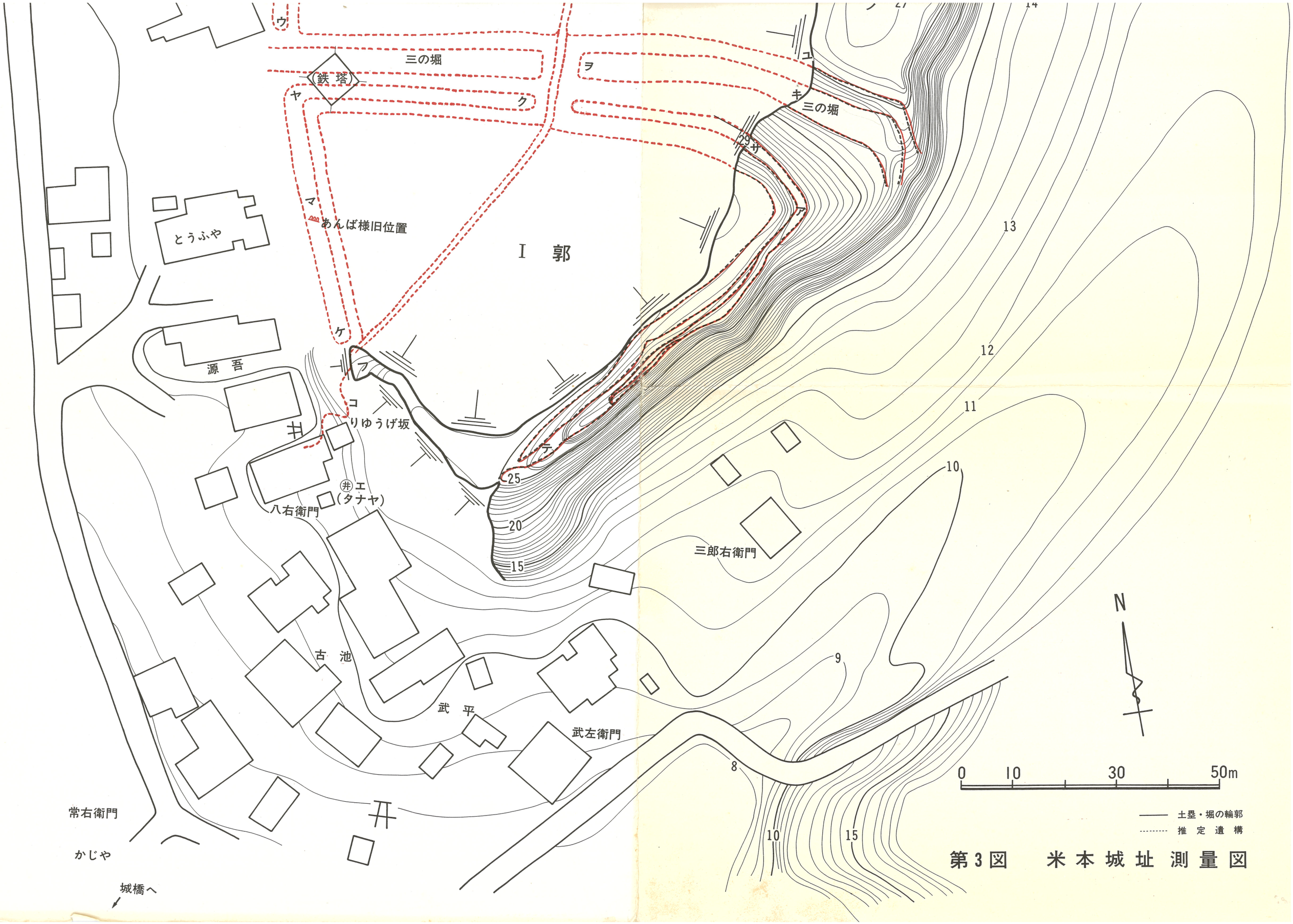
八千代中世館城址
調査報告

昭和51年3月

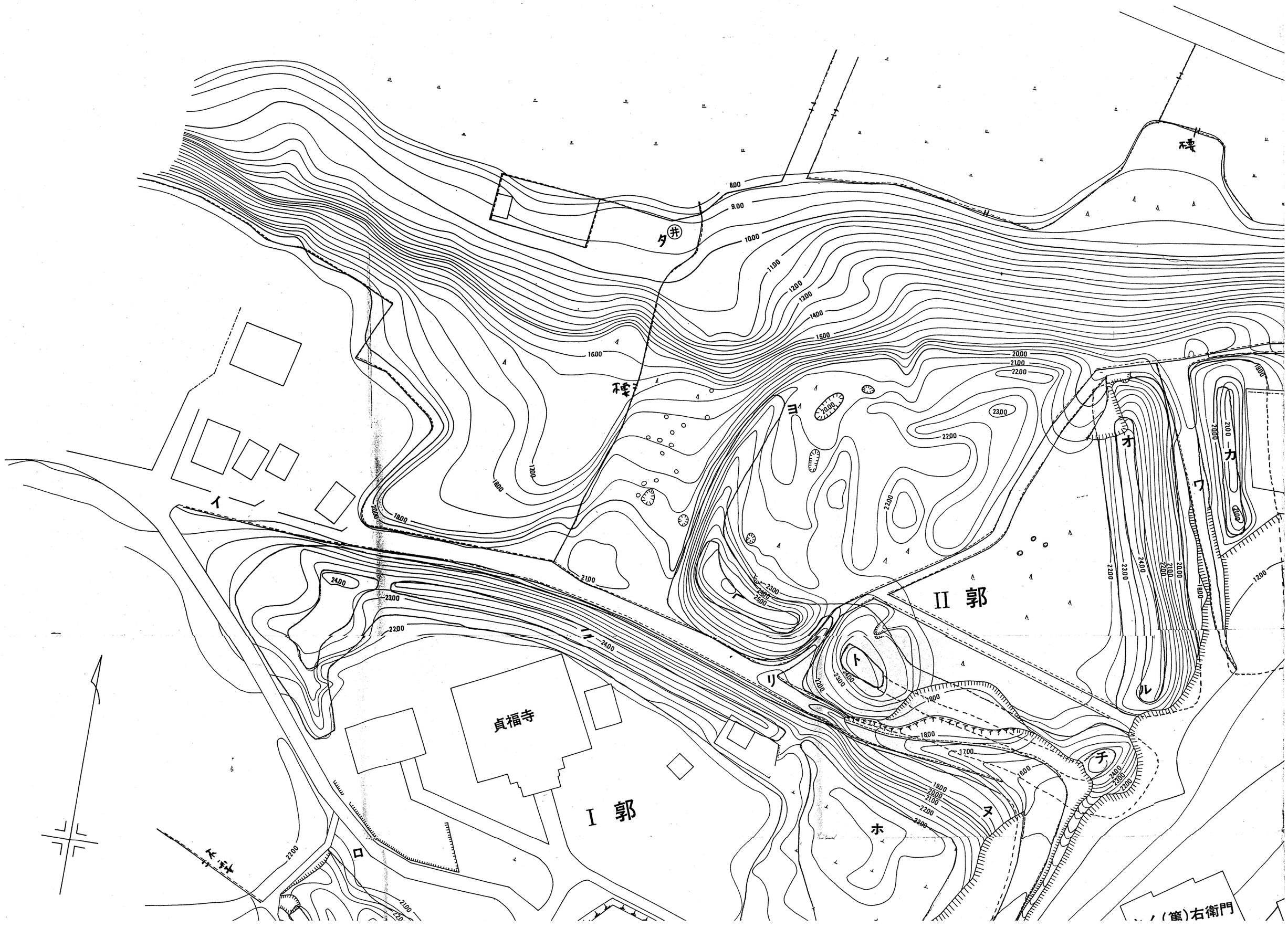
発行　八千代市教育委員会
　　八千代市中世館城址調査団
印刷　㈱文明堂印刷所
　　東京都北区中十条2－14－12
　　電話　03(908)3466

吉左衛門
新左衛門
源ニム
喜左衛門
長七
安左衛門
市左衛門
チ
文左衛門
古川
市郎左衛門
26
23
24
ロ
ト
大工
20
25
23
15
ニ
ヒ
井
22
重右衛門
リ
カゴヤ
ヌ
21
25
ホ
ヘ
オ
カ
一の堀
25
ワ
ヱ
20
助さん
ル
19
25
元右衛門
IV 郭
18
25
III 郭
20
15
タ
ヨ
17
オケヤ


カゴヤ
助さん
元右衛門
オケヤ
根古屋
とうふや
III 郭
IV 郭
II 郭
I 郭
一の堀
二の堀
三の堀
咳神様
あんば様
咳神様旧位置
あんば様旧位置
(鉄塔)
井
21
20
19
18
17
16
15
14
13
10
25
29
27

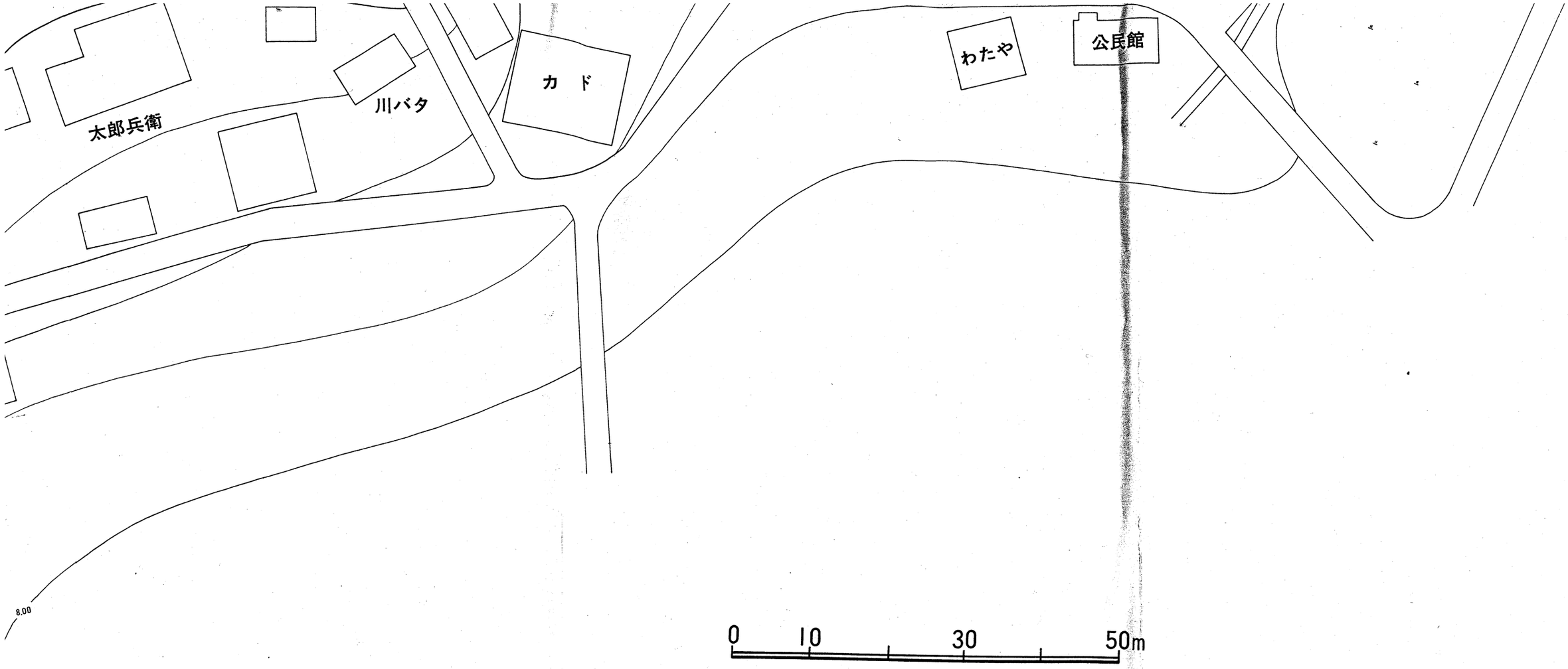

三の堀
鉄塔
ウ
ヤ
ク
ヲ
ユ
キ
三の堀
29
サ
ア
マ
あんば様旧位置
とうふや
I 郭
ケ
源吾
フ
コ
りゆうげ坂
テ
25
井
エ
(タナヤ)
八右衛門
20
15
三郎右衛門
古池
武平
武左衛門
常右衛門
かじや
城橋へ
27
14
13
12
11
10
9
8
10
15
N
0 10 30 50m
土塁・堀の輪郭
推定遺構

第3図　米本城址測量図


II 郭
I 郭
貞福寺
井
イ
ロ
ハ
ニ
ホ
ヘ
ト
チ
リ
ヌ
ル
ワ
カ
オ
ヨ
タ
8.00
9.00
10.00
11.00
12.00
13.00
14.00
15.00
16.00
20.00
21.00
22.00
23.00

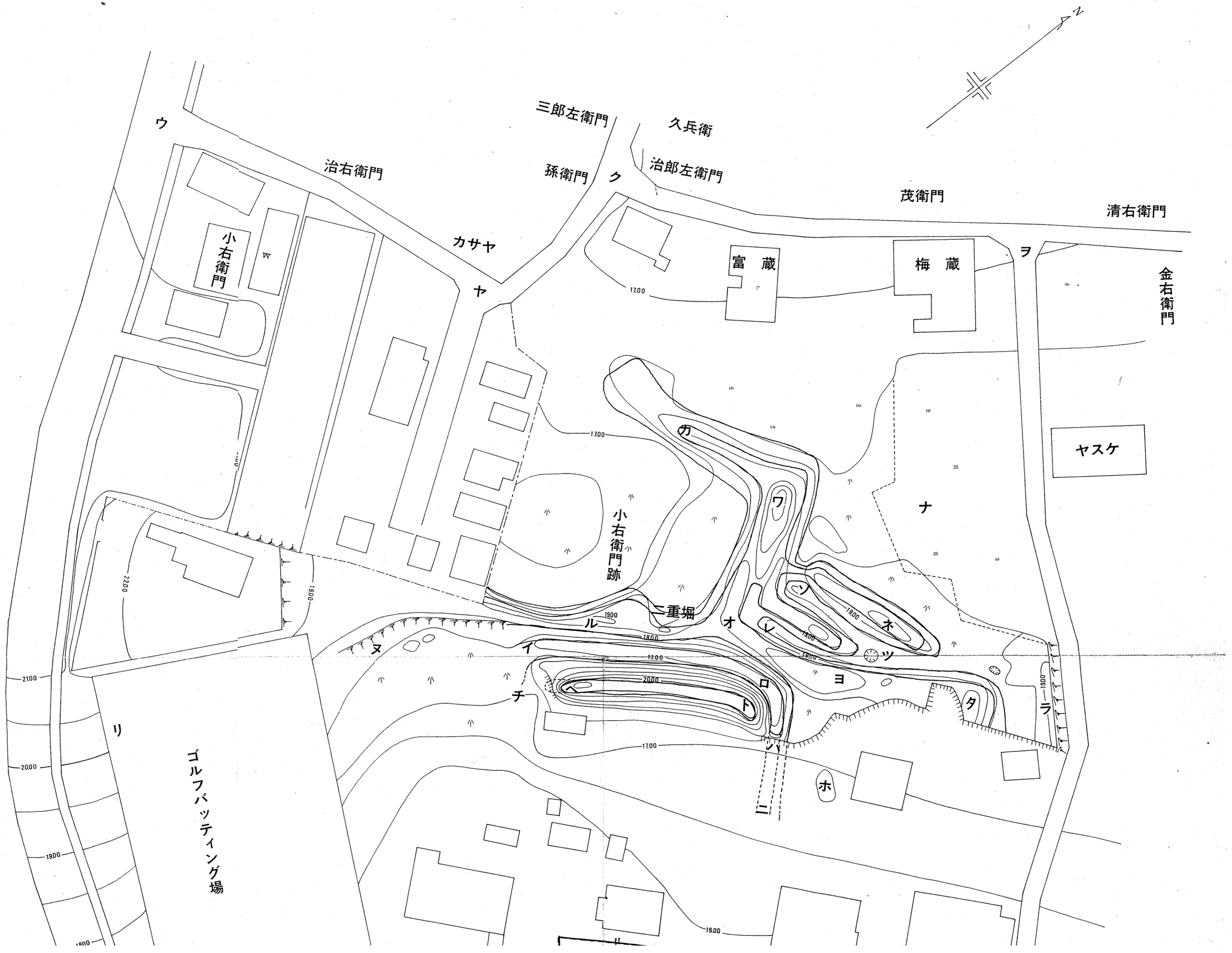
とく(篤)右衛門
五郎右衛門
藤右衛門
カサヤ
三郎兵衛
(治郎兵衛跡)
三左衛門跡
安原医院跡
新左衛門
ロ
ハ
2200
2100
2300
17.00
18.00
16.00
15.00
14.00
13.00
12.00
10.00
9.00
21.00
20.00
19.00

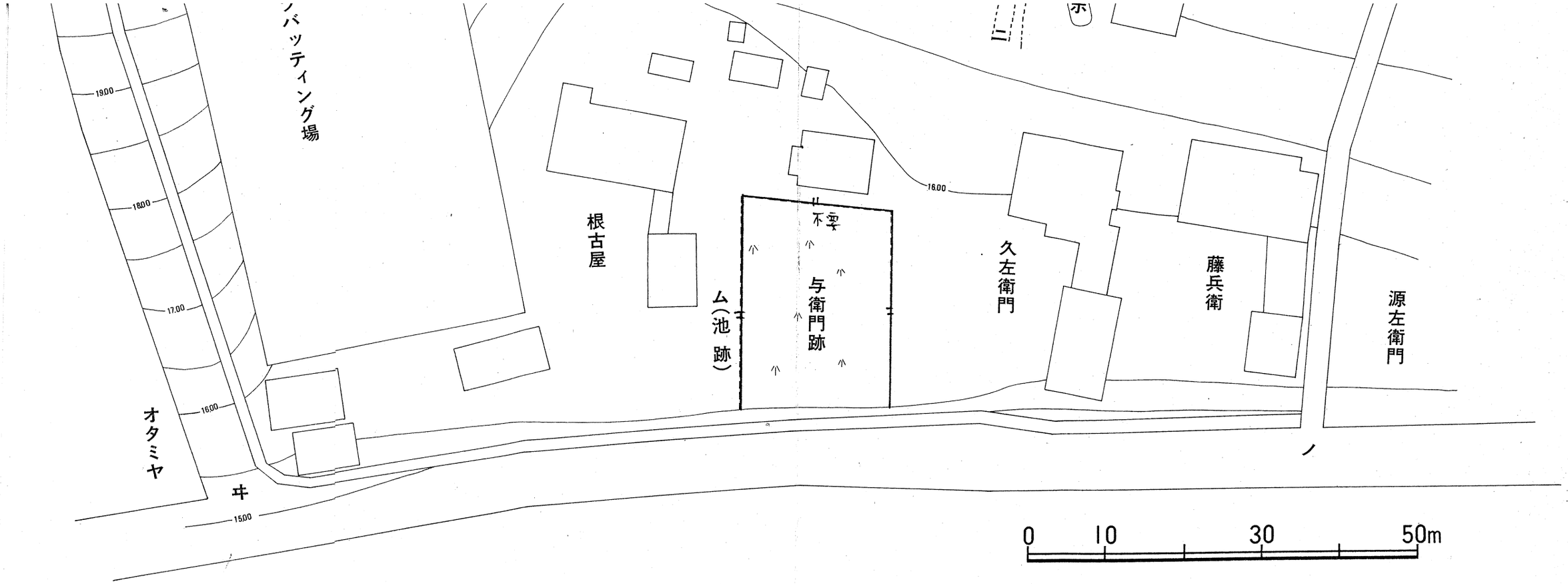
茂平新宅
喜兵衛
治兵衛
忠兵衛
縫之助
水車
レ
太子堂
大師
わたや
公民館
カド
1300
1200
1100
1000
900
9.00
10.00



第7図　吉橋城址測量図

—— 土塁・堀の輪郭
-------- 推定遺構


N
ウ
治右衛門
三郎左衛門
久兵衛
孫衛門
ク
治郎左衛門
茂衛門
清右衛門
カサヤ
ヤ
小右衛門
富蔵
梅蔵
ヲ
金右衛門
ヤスケ
カ
小右衛門跡
ワ
ナ
ソ
ネ
二重堀
ル
オ
レ
ツ
ヨ
ヌ
イ
ロ
ト
ヘ
チ
タ
ラ
ハ
ホ
ニ
リ
ゴルフバッティング場
17.00
18.00
19.00
20.00
21.00
22.00
16.00



第9図　高津館址測量図

—— 土塁・堀の輪郭
------ 推定遺構